ソオレポナ

特276
319

序

ナポレオンと聞いて、誰人の胸にも直ぐに思ひ浮ぶのは「戰爭の天才」といふことであらう。しかし、ナポレオンの偉大な能力や目的は果してそれ丈けであつたらうか。なるほど、指揮刀を高く振りかざした彼は、意のまゝに全歐を蹂躙したが、それでも、ワーテルローの一敗で跡方もなく消えて了つたではないか。そんならナポレオンの偉大な點は、一體どこにあるのか？吾人の學ぶべきところはどこにあるのか？

本書は、實にこの問題を解決せんがために編まれたものであるが、讀者諸君が、編者のこの微衷を、幾分なりとも了解せられたら、それで、編者は滿足するのである。

大正七年七月

編者識す

凡例

一　本叢書は國民教育に根柢を置き、學校科外に於ける無上の良教科書、青少年に對する絶好の良友たらしむる目的を以て發行したものである。

一　本叢書は有益にして趣味ある材料をあらゆる方面に採り、內容の精選充實に務め、知らず識らずの裡に智能を啓發し德器を成就し、堅實善良なる性情を涵養せしめんことを期した。

一　本叢書は讀者の自學自習に適せしむべく其の行文を平易簡明にし、又繪畫をも挿入することにした。

一　本書「ナポレオン」は菊池憲夫氏の執筆されたものである。

ナポレオン

目次

一　英雄の故郷……一
二　千年の獨立史……五
三　ナポレオンの生誕……九
四　搖籃時代……一四
五　學校生活……二〇
六　青年士官……二八
七　流血の巷……三二
八　ツーロンの初功名……三七
九　落魄時代……四四

一〇 暴徒鎮定……五三
一一 イタリー遠征……六一
一二 金字塔の戰……七七
一三 第一統領……八三
一四 アルプス越とマレンゴーの激戰……八九
一五 平和の施設……九四
一六 フランス王黨と英國との陰謀……一〇二
一七 フランス皇帝……一〇九
一八 英佛間の風雲……一一四
一九 戴冠式……一二四
二〇 伊太利王を兼ぬ……一三一
二一 英國侵入策……一三九
二二 トラファルガーの大海戰……一四七

二三 アウステルリッツの決戰……一六一
二四 長軀ベルリンを衝く……一八一
二五 ベルリン條令　テルジットの條約……一九五
二六 イスパニア、ポルトガルの併合……二〇九
二七 三度オーストリアを粉碎す……二二二
二八 ナポレオンの全盛、羅馬王の誕生……二三〇
二九 モスコーの雪路……二三七
三〇 諸國民の戰　巴里の落城……二五二
三一 エルバ皇帝……二六八
三二 ワーテルローの大決戰　百日天下……二七六
三三 セントヘレナの配流……二九二

目次終

挿畫目次

△ナポレオン……口繪
△チヤールス夫妻の奮戰……一
△ナポレオン幼時母に折檻さる……七
△ナポレオン砲列を指揮す……三八
△舊友ナポレオンの窮境を救ふ……五一
△ロヂの橋越……六九
△ナポレオン埃及より凱旋す……八四
△ナポレオンのアルプス踏破……九一
△敵黨撒水馬車を爆發す……一〇六
△ナポレオン部下の危急を救ふ……一二一
△ナポレオン戴冠式場に赴く……一二七
△トラフアルガーの大海戰……一五四
△ナポレオンの戰線視察……一七〇
△ナポレオン同盟軍の退却を砲擊す……一七六
△ナポレオン、フレデリツク大王の銅像を禮拜す……一九〇
△アイラウの雪中戰……二〇一
△アルレ川の戰……二〇七
△ナポレオン巴里に急行す……二二一
△ナポレオン愛將の死を哀む……二二八
△モスコーの大火……二四五
△ナポレオン巴里の空を眺む……二六八
△ワーテルローの決戰……二八四
△ナポレオン故國に訣別す……二九〇
△佛國民ナポレオンの遺骸を迎ふ……三〇六

ナポレオン

一、英雄の故郷

風光明媚の地中海

歐羅巴洲の地圖を開いた諸君は誰れでも、その下の方に亞弗利加洲との境を形づくつてゐる一つの大湖のやうな海を見出すであらうが、これは言はずと知れた地中海である。煌々と輝く太陽の下に藍を湛えたやうな海の色や煙波をへだてゝ海上に點在する大小の島嶼。さては眞晝の夢を櫓聲に破られて舷のまはりを飛び交ふ白鷗の群。穩やかな海の上を滑るやうに往來する白帆。これらの繪のやうな風光は、長い航海に倦き果てた旅客の耳目を慰め、心から快哉を叫ばせずにはおかないやうな眺めである。

また、地圖を繙いて見れば分かる通り地中海の眞中ほどに、恰度長靴の形をし

た大きな半島が突き出てゐる。これが伊太利半島とシシリー島とである。地中海は此突出によつて東西に二分せられてゐるが、その西の方に當つて南北に行儀よく列んだ二つの比較的大きい島がある。その南の方の大きい島をサルヂニアといひ北の小さい島をコルシカといふのである。諸君よ。此コルシカの名を聞いて何も想ひ起こすことはないか。

不世出の英雄ナポレオンの名を知るほどの人は、よもやその生れ故郷たる此コルシカ島の名を知らぬ筈はあるまい。

此コルシカ島は伊太利半島の西五十哩ばかりのところに位し、サルヂニア島とは僅かに九哩ばかりしか離れてゐない。その大きさはといふと、恰度我が四國の半分よりも、もつと小さいのである。

コルシカ島の地勢をいへば、大體山地であるといふことが出來る。すなはち東北から西南に、この島の中央を奔つてゐる一大山脈があつて全島を二分し、幾多の支脈が左右に分岐して海岸まで丘陵が續いてゐる。その主脈の嶺には四時白

雪を戴いて、限りない碧空を背景に、いつも浮彫のやうに聳えてゐる。山には森が鬱蒼と繁り、丘陵の谷間には、さまゝの果實が季節になると枝も撓に甘い芬香を放つてゐる。山の麓には牧場があつて、羊などの群が悠々と何も知らぬ氣に草を食んでゐる。冬は此島を廻ぐり流れる暖流があつて嚴しい寒さを感ずることなく、夏は海上から清爽な軟風が吹いて來て左程な苦熱を覺ゆることがないので氣候は頗る順和である。

地形の上から見れば、コルシカ島は實に地中海上の一平和郷である。樂園である。

しかし單に地中海上の平和郷としてコルシカ島の名を記憶してゐる人があらうか。恐らくは、誰もあるまい。

此眇たる樂土コルシカ島こそは、實にナポレオン一人を生んだがために、始めて全世界に其名を知られたのである。

然らば、こんな名もない小島が、どうしてナポレオンのやうな絶世の英雄を產

英雄を生んだ所以

んだのか。此樂土に生を享けたナポレオンが何故平和な一生をコルシカ島に送らなかつたのか――諸君は不審に思ふだらう。

いまナポレオン一代の絢爛極まりない繪卷物を繰り展げるに先立つて、少しく此點を説明しておく必要がある。

さて、これも地圖を一見すれば判る通りコルシカ島は四圍みな大陸に近い。伊太利、佛蘭西、西班牙、亞弗利加などの國々が、ぐるりと此小島を圍んでゐるのだから平和鄕だといつて濟ましてゐるわけにゆかなくなる。昔から强國がみな此樂土を奪ひ合つてゐた。我れこそ屬國にしようと隙を覗つてゐた。隨つて、此島の住民も安閑としてはゐられない。外敵を防禦しなければならない。樂天的な住民の氣象も自然に變つてくる。

こゝにコルシカ島の一都會アジャシオの一貧乏貴族に生れたナポレオン、ボナパルトが平和な一市民に了らず、この小島から振ひ起つて、他日全歐洲を席卷するに到つた所以は、コルシカの歷史を見れば始めて合點が行くであらう。以下簡單ながらナポレオンが生れるまでのコルシカ史を繙いて見よう。

二、千年の獨立史

復讐と自由

ローマに占領せらる

蠻族の征服

コルシカの歷史は、血汐に染まつた千年の繪卷である。暗い、悲しい、痛ましい戲曲のやうな幕が續いたのである。掠奪者の毒手にかゝつたのは幾度であつたらうか。征服者の餌食となつたのも幾度か。

復讐と自由との爲めに、コルシカの島民は、絕えず、血を注ぎ、肉を割いて戰ふのであつた。

上古からコルシカ人は、此島に住んで居つたが、紀元前五百六十年の頃から希臘の植民地ともなり、カルタゴの支配をも受けたが、羅馬に占領されたのは、紀元前二百年ばかりのことであつた。

紀元後四百六十年、大羅馬が亡びてからは、ヴアンダールや、ムーアの蠻族に征服された。かうして十一世紀の初め頃まで五百年の間、コルシカ島民は、必死を期

して、外敵の進入を防ぐのであつたが、其奮闘はいつも效がなかつた。

征服者の抑壓は、嚴しかつた。人民は、塗炭の苦しみに落ちた。この苦痛から脱れ出ようとして、コルシカ島民は、幾度となく正義の軍を起したのである。自由平等の爲めに戰つたのである。民主自治の國を建てようと努めたけれども、所詮は、弱肉强食の喩へに洩れなかつた。

勇敢で、母國を愛するコルシカ島民は、果して、何時までも、他國の麾下に屬せねばならぬであらうか。

タスカナ國の保護の下に在つたコルシカは、次に羅馬法皇領となり、更にピサの領土と替つた。

ゼノアの領となる

ピサの國土が擴大されたのを見て、嫉み出したのはゼノアである。その結果暴力を以てコルシカ島はゼノアに占領せられて了つた。

自由と平等！　これこそコルシカ島民が夢寐の間も忘れることの出來ない希望であつた。

愛國者パオリ

コルシカ佛國に賣らる

國亂れて忠臣出づ。長い〳〵千年の春秋を、祖國の不幸に泣いたコルシカの人民も今や起つべきの秋到れりと、胸に湧く愛國の熱情をば抑へることは出來なかつた。

自由獨立の檄文が、全島に飛んで、ゼノア政府の壓制と苛酷とから脱れねばならぬといふ鋼鐵のやうな堅い義兵は、幾度となく擧げられたが、獨立の時機は、まだ來なかつた。斯くて、天は、あくまでも無情であらうか。

勇將ガフホリオの壯擧も、更に効を奏しない。次いで現はれたのは愛國者パオリである。時に千七百六十年、コルシカの實權は、全くパオリの手に歸し、ゼノア政府は、唯名義上の領有といふに過ぎなくなつた。

そこでだん〳〵にゼノアは到底自力では、コルシカを支配することが出來ないと悟つた。丁度、千七百六十八年五月十五日、彼の有名なヴエルサイユの條約でゼノアは、遂にコルシカをば二百萬法で佛蘭西に賣り渡すに至つた。

こんな情ないことが他にあらうか。こんな悲しいことが、またとあらうか。コ

ルシカの國が、あの牛馬のやうに賣られたのである。壓制者の手から壓制者の手に賣り渡されたのであつた。

愛國者パオリの絶叫

パオリは、直ちに列國の元首に訴へて、その同情を求めた。

やがて、國民大會が召集されたとき、パオリは、演壇に立つて次のやうに述べた。

『我等は市場の羊群と選ぶところはない。コルシカは、賣られてしまつた。人間に靈魂がある。コルシカには歴史がある。

諸君よ、戰はねばならぬ。我等が行くべき道は、只一つしかない。自由を得なかつたら、國を枕に死ぬばかりである。』

つひにフランスに降る

滿場は熱狂した。全島は動搖した。そして、愛國の絶叫は、こゝに戰爭の宣言となつたのである。コルシカは砲烟彈雨修羅場と化したが、國の爲め、祖先の爲め、正義の爲めに一念凝つた鐵石のやうな島民の威鋒は、容易に佛蘭西軍に破れるものではなかつた。斯くて、數度の激戰に、コルシカの軍勢は、大いに旗色はよ

かつたけれども、小は遂に大に勝つことが出來なかつた。

矢は盡き、楯は破れて、コルシカは佛國に降るの已むなきに至つたのであつた。

かうして、獨立の軍は、終つた。コルシカの運命は、いかに變るのであらう。

三、ナポレオンの生誕

ボナパルト家

チャールス、マリア、ボナパルトと云ふのは、ナポレオンの父である。ボナパルト家は、元來、伊太利貴族の家柄で、中世紀の暗黑時代に微祿した一の分れが、亡命してコルシカ島に渡つたものらしい。そして、代々辯護士を家業として鄕人からは名家と立てられてゐる。

ナポレオンの父

チャールスは、羅馬とピザの大學に入學して法律を學んだ。才智の拔群に加へて優美な伊太利詩を善くした。風采は、ボナパルト伯爵と綽名された程であるから定めし立派なことであつたらう。

祖先の血をうけて、チャールスも愛國の志士であつた。

ナポレオンの母

ナポレオンの母は、マリア、レチ、アと云つた。まだうら若い齢でチャールスに嫁いだが、美しい、花のやうな佳人であつた。矢張名門の娘で、氣象の強い、賢明な婦人であつた。

ナポレオンは、この母についてかういつて居る。

女の肩に、男の首をつけた人――と、成る程さういふ人であつたことは、戰場に馳驅した剛勇振によつて分明る。

チャールス夫妻の奮起

コルシカの地は、今や寧日とてもない壓制と激昂とに滿ちた渦亂の巷である。コルテ市はコルシカの政治的中心地であつた。チャールスは、此所に居を占めて、辯護士を本職としてゐたが、一度獨立戰爭の幕が切つて落されるや、先づ走つて、パオリの陣所に參じた。妻のレチ、アも良人に從つて戰陣に立つたのであつた。

愛慕する母國の野も山も、森も、谷も、暗憺たる修羅場と變つた。この愛國誠忠の從軍にも、何故か天は、遂に幸運を齎らさず、義軍の旗色は、日に〳〵薄れて行くのであつた。

國破れて復た立つ能はず

一七六九年八月十五日

＊ナポレオン

國は破れて、復た起つことが出來なくなつたので、涙をのんで、運命の非を悲しみながら、チャールスはロトンド山を下り、故郷を指して行くのであつた。

月日は流水のやうに過ぎ、コルシカ歴史上、最も記憶すべき、一七六九年の八月十五日が來たが、さてこの日は如何なる日であつたのであらうか。

この日こそは、聖母マリアの昇天祭で、村といふ村、市といふ市の寺院には、鐘が鳴つた。祈禱が捧げられたが

聖母昇天祭の日

アジャシオ市の善男善女も、聖母を祀福する爲めに、相携へては寺院にまゐるのであつた。

押し寄せる群集の中に、一際目立つて美しい年若い婦人があつた。これは、忘れもせぬ。獨立の戰陣に、雄々しく馬上に跨つて、醒風血雨の間を馳驅したレチアその人である。

聖母の前に額づいて、祖國の幸ひを、一心に祈願して居つたが、俄かに腹痛を覺えて來て、到底座に堪へなかつたので、式はまだ終らないけれど、レチ丶アは已むなく、苦悶しながら我が家に歸つた。

ナポレオンの產聲

そして、やつと門を過ぎて、入口の左方の客間に着いたその時に、玉のやうな一子を生み落したのであるが、この子こそは、他日全歐洲を蹂躙して、獅子王と呼ばれた蓋世の英雄ナポレオン其の人であつた。

ナポレオンは、かうしてコルシカの一孤島に產聲をあげたのである。大風雨の最後の幕の間に、生れたのであつた。コルシカ島千年の爭亂は、蓋しこの英雄ナポレオンを產むための惱みであり、苦しみであつた。

母レチ丶アの武者振り

我れ等は、もう一度母レチ丶アの身の上を考へて見度い。

コルシカの樂土は、大砲小砲の響きで滿たされた。全島の人民は、燃ゆるやうな熱情に鼓舞せられて陣頭に立つた。

女ながらも、レチ丶アは、この危急の秋を坐ながら見てゐることが出來なかつた。

愛國の血が湧いて湧いて抑へきれなくなり、母國の爲めに、最愛の良人と共に、道のない山路、野路、深い森、嶮しい谷間を分けて行くのであつた。

血汐に染じむ草野の上に、横はる一兵卒のその屍とて、コルシカの國の一片である。この光景を見て、彼の熱情は燃えずには居られなかつた。

斯くて、憂國の涙に暮れたるレチ丶アは、今日しも聖母の昇天祭に、禮拜堂へと急ぐのであつたが、彼れが念力は天にも通じたであらう。鬼神をも泣かしめたであらう。隨つて、かういふ母の胎内に宿つた子は、凡人であらう筈がない。

我がナポレオンは、かういふ女丈夫を母としてこの世に生れたのであるが、彼が双なき英傑たる素質は、斯くて、既に母の胎内に於て授かつて居たのである。

四、搖籃時代

ナポレオンと云ふ名は、本來「荒野の獅子」といふ意味なさうであるが。彼は、正にこの意味の通りに、手に負へないやんちやであつた。

やつとまだ、二歳の時である。耶蘇教國の習慣で、彼も洗禮といふ儀式を受けることになつた。

洗禮といふのは、僧侶が、頭から水を濺ぎかける儀式であるが、ナポレオンも神の子として、この儀式に於て、その通りに水をかけられた。すると、ナポレオンは、こんな無禮な儀式があるものかといふやうな顔つきで怒り出し。矢庭に、小さい拳を振り上げて、僧侶を毆つたのである。そればかりか、傍について居た父親母親にまでも打つてかゝらんとした。

僧侶を毆る

これでは、神の信者としては通らないことだ。然し、ナポレオンが、いかに幼年の頃ながら、自尊心の強い子であつたか、そしてまた、厭らしい儀式を卑しみ得るだけの智慧を持つて居たといふことがわかる。彼の頭は、將來、黄金の王冠を戴くのであつたから、貴いには違ひないが、まだ頑是のない二歳の子としてはその發明さは一通りでない。

栴檀は雙葉より香ばしく、蛇は寸にして人を呑むといふが、ナポレオンも正にその譬への通りであつた。

ナポレオンは八人兄弟の第四子として生れた。八人といふ大勢の子女であるから躾け親の骨折も、なか〳〵一通りではなかつた。

親は、大きな一室を子供の遊戯室に定め、そこで一緒に遊ばせることにしたがその室内で、相撲をとつたり、喧嘩をしたり、泣いたり笑つたり騒ぎまはる兄弟とは、うつて變り、ナポレオンだけは、獨りぽつちで、壁の上に何時も戰爭の繪を描いてをつた。又、幼い時から軍ごつこが大好きで、太鼓を打つたり、劒をふ

ナポレオンの遊戯

つたり、喇叭を吹いたりして遊ぶのであつた。

ナポレオンは、いつもお山の大將で、遊び仲間を意のまゝに支配したが、母のレチヽアは、ナポレオンが、あまりに我がまゝなので、いつも手厳しい折檻をするのであつた。

或る秋の日のことである。庭園に一株の林檎の樹があつた。眞紅な、美味しさうな實が熟してゐたから堪らない。母からは、とつてならぬと、堅く禁じられて居つたが、ナポレオンは、それを聞き入れず、隙を狙つて、する〳〵と林檎の梢に上り、まんまと、一つもぎとつたが、もう一つ慾ばつて、とらうとしたのが最後、枝はポキリと折れて、すつてんどうと、落ちた。

こんな目にあふと、大抵な子供は、めそ〳〵と泣き出すのだが、ナポレオンは道に涙一滴も浮べず、衣服の塵埃をさつぱりと拂つて、悠々と立ち去らうとしてゐた。

その時唯ならぬもの音にびつくりして、下男が飛んで來ると、ナポレオンは、こ

の失策を母に告げてはならぬと口止めしたので、何處まで小賢しい子供であらうと下男は後姿をぼんやり、見送るのであつた。

母の折檻

ナポレオンは、し了せたりと、濟ました顔で、その外へ遊びに出て行つたが、夕方になつても歸つて來ない。ひよつとしたら、あの下男奴、母にこのことを告げたのではなからうか。もし、さうとすれば、酷い目に遇はねばならぬから、母親に見つからぬやうに遲く歸るが得策と考へ、彼は、方々を遊び廻つて時を移し、夜になつて、母の寢た時分と思ふ頃、忍び足で我が家に歸つて來た。

ところが、母は、いつまでもやすまばこそ、彼れの來るのを待つて居たのでナポレオンは、一たまりもなく、嚴しい折檻をされた。子に甘いのは親の常である。殊に母親となると尙更さうである。然るに、母レチチアは、決して子に甘くはなかつた。

明くる朝になつてから、母はナポレオンを件の林檎の樹の下に呼び付けて、さも嚴しく戒めたのであつた。

ナポレオン女兒の小學校にやらる

このやうに、ナポレオンは手荒な、腕白者であつたが、よく母の云ひ付けを守つた。英雄ナポレオンは、かうして育てられて來た。

五歲の時、ナポレオンは、女兒の小學校に入學した。何うして、彼は女の學校に、はいつたかといふに、これも母レチチアの考へであつた。もの優しく敎育してやることが、放恣で粗暴な彼れにとつて最も善いことであると思つたからであつた。

黑パンの方が好き

毎朝學校へ出かける時に、母は白いパンの片を渡した。ところが、彼れは、その白いパンを好まなかつた。そして、黑い、不味い方を欲しがつた。

母は、あやしんで、問うた。

「何ぜ、お前は、白いパンを好かないの？」

軍人の下稽古

ナポレオンは、

「何ぜつて、それはね、私が大きくなつて軍人になると、黑いパンを食べねばなりません。ですから、今の中にその下稽古をして置くつもりです。」

と答へた。

彼は、この時代から已に軍人になることを心掛けて居たのであつた。立派な大將になるには、一朝一夕で出來るものではない。

鬼神と呼ばれるほどのナポレオンは、かうした第一歩から踏み出したのである。彼の幼年時代に於ける逸話は、なほ澤山あるけれど、私共は、それよりも彼の少年時代について多く知り度いから、幼時のナポレオンは、これで筆を止める。

さて、こゝに記して置かねばならぬことは、彼の父チャールスが、形勢の如何ともすべからざるを察し、多數の島民と共に佛國の民籍に入り、佛王ルイ十五世に臣從したことである。

五、學校生活

彼れの父チャールスは、其の時鄉里で、裁判官をして居つた。そして佛蘭西本國の貴紳名士と親交があつたので、父の親友たるマルブーフ將軍の斡旋によつて、

ナポレオン兄と携へて佛國に留學す

ブリエンヌ兵學校に入る

彼れは、ブリエンヌの兵學校に入學することになつた。丁度九歲の時である。それも皇室費を以て留學することになつた。千七百七十八年十二月十五日彼は兄のジョセフと共に、父に伴はれて佛國へ向けて出帆した。

何んといつても、まだ十歲に足らぬ少年である。海を越して遠い異國に旅立つのであるから、未來の英雄偉人でも、煙波の彼方に、故國コルシカの島が見えなくなつた時は、母戀しさに、どんなにか小さい胸に悲しく思つたことであらう。更けてゆく夜半にも、夢結び兼ねて何時までも懷鄉の念にうたれては、小さい眼に、熱い涙を滋へたことであらう。氣を取り直しては、行く先きのことなど、それからそれへと考へたことであらう。

彼は船旅を無事に終へて、マルセイユに上陸し、それからオータン市にをつて數ケ月間佛語を修業し、愈々ブリエンヌの兵學校に入學したが、口さがなき佛蘭西子の大勢は、彼れに、寄つてたかつてコルシカの田舍者と輕蔑するのであつた。

剛情で人に屈せぬ彼れは、このことを何んなにか、くやしく思つたことであらうしてまた彼は、華奢と虚榮とを誇る懦弱な風をひどく恐れた。

非常な勉强家

そこで、彼れは友と交ることを避けて、餘暇さへあれば、植ゑ込みのほとりに讀書するか、又は冥想に耽るのであつた。

彼れは、非常な勉强家であつた。彼れの好む學科は、數學と地理と、そして歴史であつた。して、彼は、常にプルダークの英雄傳を愛讀して居つた。アレキサンダーやシーザーは彼の理想の人物として胸中に深く描くのであつた。

生徒仲間の侮蔑に屈せず

然しこれは、決して野心からではない。また功名心からでもなかつた。故國コルシカを思ひ出す時に、小さいナポレオンの胸は愛國の焔に燃え、祖先の國を元のやうに獨立させたいと熱心に思ふのであつた。

彼が古英雄を慕ひ、また第二のパオリたらんとする抱負を持つのも、みな愛國心の横溢であつたのだ。生徒仲間は、屬國のコルシカから來た者だといつては何時も彼を蔑んだ。すると彼は『コルシカが、若し佛蘭西の四分の一の領土を有して居たら、決して負けるのではなかつた』といつた。

牧師をやりこむ

いつとはなしに、このことが學校長の耳にはいつた。校長は、か樣な革命兒を學校から出してはと非常に心配し、早速或る牧師に頼んで、ナポレオンを説服して貰ふことにした。

牧師は、校長の依頼により、ナポレオンを呼びつけ、淳々とその不心得を諭した彼は默つて聽いてゐたが最後に、

『あなたは、牧師でありませんか、牧師といふものは、世の中の愚者を集めて、有難いやうな話をきかしてをればよいのです。何も兵學校まで來て私の考へを兎やかういふ必要もありますまい。』と、きつぱりいつて、退けた。

小愛國者の眼中

少年ナポレオンの目から見れば、牧師などは齒牙にかくるにも足りないものであつた。それ以來、彼は校長を始め、教官や同窓生にまで、危險人物として疎ぜられた。

小愛國者の眼中には、もう佛蘭西などは一呑みにする位にしか思つてゐなかつ

たかも知れぬ。『何れの時か、我れ、汝等の國土を征服して、コルシカ人の强いところを見せてやらう』

といふ信念は、片時も彼の胸裡を去らなかつた。

ナポレオンは、早くも十五歳の春を迎へた。

古語に、「運は、ねて待て」といふことがあるが、棚のボタ餅は、たゞ寢てばかりゐては、落ちてくる筈はない。「ねて待て」とは、「練つて待て。」といふ意味であらう。富貴榮達は、決して骨折りをせずには得られるものではない。大業偉績は僥倖で出來るものではない。

世間にはよく、『彼奴は運のいゝ奴だ。何一つ出來ぬ癖に、立身出世をした』などとさも、眞實らしく話しあつてゐるのを聞くが、これは大抵、怠惰者のいふ言葉である。兎に角世間で目立つだけの人間となるまでには、その當人は、他人の知らぬ、苦心や忍耐や努力があるものである。

ナポレオンにしても、さうである。彼が少年時代にあれほどの勉强をしなかつ

たら、決して金冠を戴くことが出來なかつたに相違ない。

彼は、ブリンエンヌ兵學校から選拔されて、巴里の士官學校に送られることになつた。

ナポレオンは、最初兵學校を卒業したら海軍の軍人にならうと思つてゐた。それは、コルシカの島に、自分の出世を待ち玉ふ父母の膝下を訪づるゝ機會があるを爲めであつた。またコルシカ人は、海國で育つてゐるから、小さい時から海のことに馴れてもゐるし、且つ親しい人から海軍を望むやうに勸められたからであつた。

ところが、母のレチチアは、海上生活は危險が多いといつて頻りに陸軍をすゝめた。彼自身も亦、他日大事を爲すには陸軍の方こそ好都合だと思つた。

そこで、彼は初志を翻して士官學校に行かうと決心した。然し、士官學校といつても何人でも入學されるといふ譯に行かぬ。猛烈な選拔試驗を經なければならなかつたが、彼れが螢雪の功は空しからず、彼は。この試驗に第一位の成績で

通過したのであつた。

彼は、また新たなる光明を喜びながら巴里の都に向つた。

ブリエンヌの兵學校で驚ろいたコルシカ島の田舍少年は、更に巴里の士官學校にきて、生徒の餘りに贅澤なのに呆れた。

巴里の都は、昔から華麗を競ふところであつたから、軍隊教育もこの惡風に化されて實にお話にならぬほど懦弱なものであつた。

學科の中に、舞踏の一科がある。剛健で質實でなければならぬ軍人が、舞踏のやうなものにこるやうになつては、全く無茶である。これでは迚も士官の養成などといふことは表面ばかりのものだと嘆息を洩らしたナポレオンは、スバルタ人と綽名された位であるから、スバルタの氣風を以て、軍隊教育の眞義と思つて居たのである。

スバルタ人と綽名

彼が學校に來たのは、勉强の爲めであつて、遊びに來たのではなかつたので、彼は斯ういふ華奢懦弱な風を見て不快でたまらず、一の意見書を作つて校長に上申したことさへあつた。

一七八五年の夏、ナポレオンは十六歳で士官學校を卒業することになつたが、いよ〳〵一人前の將校となつたのである。そして、砲兵少尉として、ヴロンスの聯隊に附くことゝなつた。この時に於ける彼の得意は、何んなであつたらう。

砲兵少尉となる

これより先き、丁度二月の末であつた。父チャールスは胃癌の爲めにこの世を去つたのであるが、臨終に當つて、父はナポレオンの名を連呼して、

父世を去る

『まだ來ないか、彼の太刀はきつと我が病ひを退くるであらう。』

と云つた。

『あゝ自分を、あんなに愛して下さつた唯一人の父上がもう此世に在ますのかどんなにか自分の卒業を待ち詫びてゐられたらうに……。せめては此少尉の服裝を一目御見せしたかつた。……』

ナポレオンの聽嘆

ナポレオンは榮ある卒業を歡びながらも、一面また斯う考へて、云ひ知れぬ悲しみと淋しさとを感じた。

六、青年士官

砲兵隊にはいつてからはナポレオンも、時々は交際社會に出入りするやうになつた。お世辭もいへば、戯謔もいふやうになつた。しかし、多くの將校とは違つて、他一倍練兵も眞面目であつた。舞踏や宴會へもあまり出かけなかつた。相變らず、讀書は好きであつた。こゝに來ても、プルダークの英雄傳やシーザーのガリヤ戰記を繰り返して讀んだ。

他一倍練兵に熱心

彼はまた、深甚の注意を拂つて財政、統計、宗教、政治等の研究をもした。殊に興味を拂つてゐたのは、ギリシア、羅馬の歴史と、印度、支那、アラビア等の東洋事情であつた。

論文を作る

ヴランス在勤中に彼は數多の論文を作つたが、これらの論文原稿は、今フローレンスの圖書館に保存されてある。夫等を見るとナポレオンが如何に此時代からいろ〳〵の方面に他の知らぬ研究をなしてゐたかゞ分る。又彼が單に軍人として

偉い者にならうとする外に、密かに、ある大抱負を持つてゐたことが後から思合はされる。さて思ひ起せば懐かしい生れ故郷に別れを告げてから、早くも七年を過ぎた。孝心深いナポレオンは、幾歳になつても、子供のやうに母の許がこひしかつた。雨の日、風の日、雪の夜、思ひはいつも遠いコルシカの島に飛ぶのであつた。が、遂に機會到來して、一七八六年の九月、一年の賜暇をもらつて、彼は故郷に歸つた。彼が家郷を去つたのは九歳の時であつたが、いまや十七歳になり、丁度、八年ぶりの歸郷であつた。

八年振りの歸郷

故郷の山や、河や、森や、美しい橄欖樹の蔭や、葡萄園の下など、何れも昔のことを思ひ出す種ならぬはなく、小英雄の心は嬉しさに滿ちた。

さていよ〳〵家に歸り着くと、弟妹は、ナポレオンの手にすがり肩にかゝつて喜ぶのであつた。母レチヽアも、我が子の成人の樣を見て嬉し涙に暮れた。それにつけても思ひ出さるゝは、幽明を隔つた父のことであつた。

思出さるゝ亡き父上

「父上は、よく私を可愛がつて下さつた。いまはの際に、私の名を呼ばれた

さうな、あゝ、せめて今日まで御存命ならば、私の成人をどんなにか喜んで下さるだらうに……』

ナポレオンは、今更ながら、「樹靜ならんと欲すれども、風やまず、子養はんと欲すれども、親またず。」といふ感慨を痛切に味つた。

歸省中といへども、彼は一日も讀書を廢さなかつた。家内が騷々しいときは避けて屋根裏で勉強した。

現實的で理想家

彼は、科學ばかりでなく、プラトーの哲學も研究した。彼には、一方に於て現實的なところがあると同時に、他の一方に於て、また頗る神秘的なところがあつた。彼は冷靜な現實家で、また大なる理想家であつた。巨人であつて、また子供であつたのだ。彼はまた、筆を執つて著述もした。文學上の創作もした。何たる絶倫の精力であらう。

オーゾン聯隊附

賜暇の期限が果てると、彼はオーゾン聯隊附となつて赴任した。

彼は、軍隊生活には、あまり興味を感じてをらなかつた。武人としてよりも、平和を好む人になつてゐた。勤務を終へると直ぐ本を讀み、運動もせずに、勉強をしたので、睡眠は常に不足勝であつた。そこで、とう〳〵神經衰弱にかゝつてしまつた。

二度目の歸郷

一七八九年の九月、またぞろ、休暇をもらつてコルシカに向つた。

色蒼ざめた病少尉が家路につくのは、果して何の爲であらうか「コルシカの獨立」といふ大望を胸に秘めて家郷に歸るのであつた。ナポレオンは、まづアジャシオの志士を、サンフランスの寺院に集めて云つた。

コルシカの獨立運動

『權利といふは、自然が萬民に賦與したものであるのに、我等は今やそれを奪はれて居る。されば、我等コルシカの人民は、奮勵一番して、是非ともそれを取り返さねばならぬ。』

非痛なる彼の演說は、よく聽衆の心腸を抉つて、こゝに端なくも獨立運動がおこるのであつた。

斯くて、一騷亂があつて、佛本國から次のやうな法令が發布された。

＊ナポレオン

「コルシカは、爾來、佛國の屬島にあらず、
内地の諸州と同様に、佛共和國の一部分なり。」

コルシカ人民の權利は、確定された。一少尉ナポレオンの力によつて自由平等の國となつたコルシカ全島は、歡喜と萬歳の聲で滿たされた。

ナポレオンは、その素志の一部分を遂げた。そして、

「コルシカと、佛蘭西とは同一の苦樂の下にあるのだ。兩者の間を隔離するものは、たゞ海洋ばかりである。」

といつて、心中、大いに滿足するのであつた。

やつと青年になりかけたばかりのナポレオンは、コルシカについて難なく素志の一部分を遂げたが、この事、すでにナポレオンが非凡なる人物であるといふことを示してゐるではないか。

七、流血の巷

當時佛國の形勢はと見れば、王室は驕奢を極め、貴族僧侶は跋扈し、人民は困憊してゐた。カーライルといふ人が、「十八世紀の自殺」といふことを云つたが、佛國も、いまに、この悲劇の中に捲き込まれようとしてゐた。

人民の、自由を叫ぶ聲は、喧しくなつた。

前の佛蘭西王ルイ十五世の虐政は、痩せた佛國人を作つた。（英國の諺）また或る人は、かういつた。

『佛蘭西は、大病院のやうなものである。疾苦に滿ちて、而も食物がないから、まづ療法は、革命か、滅亡かである。』

女や、子供の行き倒れが、こゝにも、彼處にもあるといふ慘目な有様であつた。

時にこれ、一七八九年の七月十四日の事である。巴里の暴徒は、まづバスチーユの獄を破壞して、革命の火蓋を切つたのであつた。

自由民權の思想は、益々盛になり、騒亂はいよ〳〵激しくなつて來たので、一七九二年、ルイ十六世は、チユイレリーの王宮を、命から〳〵逃げ出さねばなら

＊ナポレオン

ぬことになつた。

ところが、オーストリアとプロシアの同盟軍が、佛國貴族と通じ、國境を越えて、攻め入り、自ら問罪の師と稱して、もし巴里人が、これによつて、國王を虐待するならば、市街を破壞してしまうぞと脅したが、佛國人の憤慨は、一層はげしくなつた。

マルセーユの義勇兵は、革命の歌「マルセーユ」を歌ひながら、巴里の都についた。

この血祭騷ぎの間、ナポレオンは何うして居たのだらう。

彼は、コルシカから巴里に歸つた。そして、暴徒が、王宮を襲ふ光景をば下宿やの窓から、眺めてゐた。

佛蘭西は、一體、何らなるだらうか？　何人が、これを豫期することが出來よう。

彼は何物かを胸中に懷いて再びコルシカに歸つて行つた。

恐怖時代

ナポレオン家族を伴つてコルシカを出づ

ルイ十六世は、斷頭臺の露と消えて、こゝに王政は全く轉覆された。然し、自由はいまだ得られなかつた。ローラン夫人が死刑に處せらるゝ時、叫んだやうに自由の名に於て多くの罪惡が行はれた。歷史でいふ恐怖時代といふのがこの時である。自暴自棄になつて、手あたり次第、虐殺が行はれた。

金持ちだといつて殺され、百姓の娘が王黨の歌を歌つたといつて頸を刎ねられるなど、まるで巴里は血に醉つた狂人の横行ばかりであつた。

この時、ナポレオンはコルシカから家族を伴つてツーロンに着いた。彼は、再び祖國の獨立を企てゝ成らず、迫害が身に迫つて來たので、やむことなしに家鄕を離れてきたのであつた。實に一七九三年の六月の事である。

そしてマルセーユに、旅裝束を解いて、細いながらも睦まじい一家を立てた。併し、生命からく夜逃げをして來たのであるから、その生計の困難なことは、一通りでなかつたので、彼は、こゝかしこと工面をしてあるいた。

當時、佛蘭西には、ジロンド黨とジャコベン黨といふ二派があつた。ジロンド

ジロンド黨とジヤコベン黨

黨は、巴里の獄舍に囚はれてゐる今年八歳になる王子を、ルイ十四世と稱へて元の王政に復したいといふ望をもつて居るもので、ジヤコベン黨は、自由平等を標榜して民政を布かうとする方であつた。

ナポレオンの復職

ナポレオンは、ジヤコベン黨に隨いてをつたので、其の黨派から、殉道者として取扱はれ、ジヤコベン政府から、少しばかりの扶助金を給與され、それで以てやつと一家の日が凌げるやうな道をつけ、やがて、ニースの聯隊に復職した。

巴里の市は、成るほど、過激なジヤコベン黨の勢力ばかりであるが、他方には

ナポレオンの著書出版

いると、ジロンド黨の繩張りのところもあつた。そして、時の政府に敵對してゐた。

「ナポレオンは、この時分、小冊子を書いて出版した。それには、ジロンド黨の叛亂には、理屈のないこと、又、佛國民は、巴里の政府に屬從することが正當であるといふことを、わかり易く說明したものであつたが、政府の方では、中々、よく出來てゐるといつて、賞讃した。

ツーロンのジロンド黨叛亂

兎に角、こんなことで、彼の名は、漸く知られてきたので、これを機會に、ナポレオンは、兄弟や叔父の就職口を見付けてやつた。

ところが、ツーロンのジロンド黨が、叛き出して、そのやり方は、穩やかでなかつた。政府黨と見れば、虐殺した。そして、英國やら、西班牙やら普魯西、墺太利、和蘭で歐羅巴大同盟國を作つて加勢するといふ騷ぎとなつた。

ツーロンの火藥庫が英國軍の手に歸したと傳へられてからは、國民の激昂極度に達した。

八、ツーロンの初功名

ツーロン包圍軍

やがて、攻伐の兵隊が送られた。そしてツーロンを包圍した。

この攻擊軍の司令官といふのは、カルトー畫師あがりの人で、作戰にはあまり長けて居なかつた人で、月を重ねても、落城しなかつた。攻擊軍によつて、口惜しいことには、砲兵の活働が、鈍かつた。

そこで、司令官は、部下を派遣して砲兵の指揮官を見つけることにした。時到れり矣。重任を負つて、砲兵隊長に推薦されたのは實にナポレオンであつた。

一意專心といふ言葉があるが、彼が隊長となつてからの勤務振りは、まさにそれであつた。

眠りもしない、休みもしない、陣頭に立つて、自ら號令した。あまり、全力を注ぐので、夜になると疲れが出てきた。それでも、彼は、外套にくるまつて、兵卒と一緒に、大砲の傍にまどろむのであつた。

ところで、ナポレオンの豪いところは、また別にある。彼は砲兵隊にゐながら、攻撃軍全體のことについて綿密な注意を拂つた。敵塞を破るには、砲兵隊ばかりで可いものではない。全軍の連絡、すべての準備、補充といふことが大事であるからである。

彼には、絶大な精力があつた。また不屈の忍耐力があつた。彼は決して骨惜といふことをいはなかつた。よく、まあ、あのやうに、まめに動けるものだと思は

ナポレオン全軍の中堅

れるまでゞあつた。兵糧、彈藥の準備もした。人夫や馬匹の徵集もした。兵器の補充、銃砲の修繕に至るまで、彼は熱心に命令し、且自らも働いて世話するのであつた。

かうなると、自然、攻擊軍の中堅がナポレオンにならねばならぬ。一少佐（彼は此時、すでに昇進して居た。）の彼が、恰も全軍の大將であるかの如き風であつた。斯くて、愈々彼の作戰計畫が採用せられることになつたが、その苦心空しからず、ツーロンは、遂に陷落した。

ツーロンの陷落

ツーロン軍中の逸話

ツーロン軍中で、面白い物語がある。

或る日、ナポレオンは、大事な使者を立てねばならなかつた。ところで、その使の者を、何うして選ぶべきかといふことが、なか〳〵六ケ敷い問題であつたが。殊に、多數の兵士であるから尙更のことであつた。

すると、一兵士が自ら進んで出て、

『隊長殿、何うぞ私を使にやつて下さい。』

と云つた。ところがナポレオンは、

『よろしい。それでは、軍服を脫いで、この手紙を持て前方の海岸へ行つてきてくれ。』

と命令した。一體、前方の海岸は、敵軍の繩張り內で、迂濶に軍服を着て行かうものなら、直ぐに捕へられて殺されるか。または、牢屋にぶち込まれるは必定のことであつた。かういふ考からナポレオンは、裸體になつて行けといつたのである。

ところが、一兵士は、開き直つて、

『隊長殿、私は、そんな秘密探偵のやうな變相は出來ません。私も一人の佛兵です。このこと丈けは斷じてする譯にはまゐりません。別に、使をば選んで下さい。お願ひです。』

といつて、退くのであつた。

ナポレオンは、矢庭に呼び止めて、

『こら待て、汝は、上官の命令に背くのか、嚴罰に處するから、さう思へ。』

と怒氣を含んで言つた。すると兵士がいふには。

『命令の本旨には、決して背く氣ではありません。たゞ軍服を脱ぐことが私には忍ぶことが出來ぬといふ丈けのことです。軍服をつけたまゝで行き度いのです。』

ナポレオンは、うなづきながら、

『さうか、然しな、汝は、軍服のまゝで行けば、殺されるよ。さういつたら合點が行くだらう。』

と云つた。するとその兵士は、

『而し、私の生命は私の生命です。殺されて死んだからとて、隊長殿には一向關係がないではありませんか。首尾克く命令を果して了つてから、同じ死ぬなら、佛蘭西の軍人として立派に死に度いと思ひます。』

『よろしい。そんなら軍服をつけて行け』

と命じました。

兵士は、いそ〳〵として出かけました。軍歌をうたひながら、危險區域の方へ。

ナポレオンは、後ろ姿を見送つて居たが、

『彼は、きつと出世するよ。』

と獨り言をいつて、ポケットから手帳をとり出して、その名を書きとめるのであつた。兵士は、ジュノーといつた。この一兵卒が後にナポレオン股肱の一將軍となるのである。

さて、ツーロンを引揚げて、ナポレオンは、上官のジューゴミエといふ將軍と同行してマルセーユについた。

すると、或る人がジューゴミエ將軍に問うた。

『あの青二才の士官の名は何と云ひます？　閣下はあの男を何處から拾ひあげられましたか、』

將軍は答へて

『彼は、ボナパート、ナポレオンといひます。彼はツーロンの軍では、大功を立てました。私は、彼をツーロンで拾つたのですが、彼の士官は、將來、君よりも、私よりも立派な人間になりませうよ。』

ナポレオンの名聲は、日に〳〵高くなるのであつた。

九、落魄時代

ツーロンの戰は、ナポレオンにとつては、成功の門出ともいふべきものであつた。

彼は、その手柄によつて、少將に昇進した。丁度二十四歳の若年であつた。

一七九四年の七月、小ロベスピエール等の引立で、伊太利征討軍の實權を握ることゝなつたが、彼は敵をアルプス以南に追ひまくり、次で、ゼノアに行くことになつた。當時、ナポレオンの使命といふのには、二つあつた。一つは、局外中立

たるべきゼノアが、この頃、英國やオーストリアと內應してゐる形跡がある故、これを攻めるにあつた。もう一つは、あはよくば、ゼノア國を取つてしまはうといふのであつた。つまりその邊の機密を探る爲めであつた。

ところが、この時、丁度巴里では一騷動が持ちあがつた。夫れは巴里の政治を一人で切り廻して居つたロベスピエールが、危ふくなつてきたことである。國會議員の多數が、獨裁官たるロベスピエールに反抗したのであつた。そこで、弟のロベスピエールをも巴里に呼びよせることになつた。この小ロベスの思ふには、かういふ時にこそ、あの稀有なナポレオンを連れて行つて、參謀としたら、この危急を防ぐことが出來ようと考へたから、ナポレオンにその話をもちかけたのであつた。

ところが、目の利くナポレオンは、早請合はしなかつた。そこで兩人は、巴里とゼノアとに別れることになつた。

とう〳〵巴里の檜舞臺が變つた。

ナポレオン拘引狀を發せらる

つひにロベスアピエール兄弟は、一味九十餘人と共に、斷頭臺の錆と消えたのである。これを、テルミドルの革命といふのである。

そこで、災難は、ナポレオンの身に及ぶことゝなつた。ナポレオンもロベスピエール黨と見られてゐたので、官憲の手は、早くもナポレオンに拘引狀を渡したのであつた。

ナポレオンの陳情

伊太利征討軍にある青年將校等は、この狀を見て、その不當を鳴らした。或るものは、ナポレオンに向つて、服罪する理由がないから、逮捕を拒む方が可いだらうといふものもあつた。

ナポレオンは、

『無論、余は罪あるものではない。只だ國法に從つて行く丈けのことである。』

といつて、平然として囚はれの身となつた。

獨りナポレオンばかりではない、彼の兄弟も、官職を剝がれた。

何といふ打擊であらう。彼は。當局に宛てゝ陳情書を差出した。それには、自分が、決して政府に對して二心のあるものでないことが說明されてあつた。

手柄こそあれ、何の罪もないナポレオンを、縛るのは不當であるといふことが分つて、彼は放免といふことになつた。

然し、生命は助かつたといふものゝ、前途に對しては、何らの光明をも認むることが出來なかつた。

ナポレオンの落魄

英雄ナポレオンも、かうして、浮世の風波に浮沈せねばならなかつた。彼は、斯うした運命の手に翻弄せられながら、マルセーユの母を訪ねたが、母は、今日の日も、何うして暮らさうかといふ、可哀さうな貧苦の中に呻吟して居つた。時計を質に入れて、やつと一時を凌ぐといふ有樣であつた。

都に行つたなら、何ぞ、うまいこともあるだらう——と便りないことを考へながら、失意のナポレオンは、巴里をさして旅立つことになつた。友人をたよつて行つたが、救つてくれるものはなかつた。知己を訪ねて行つたが、誰も用ひてはくれなかつた。

虎となり、龍ともなるべき一代の風雲兒も、かうなつては、世の中が厭になつたらう。さすがのナポレオンも思案に暮れて、いつそ一思ひに、川に身を投げようかと、セーヌの畔を、逍遙つてゐた。

すると、向ふから、一人の職人風の男が、やつてきた。

『お前は、ナポレオンじやないか。』

といつて、つか〳〵と、傍によつて來て抱きつくのであつた。

氣がついて、ナポレオンも、その男を見ると、忘れもせぬ、昔馴染のデマーシスといふものであつた。

兩人は、セーヌの川岸に、腰を下して、無心の水の流れを眺めながら、分れてから後の浮世話に時を移すのであつた。

デマーシスは、革命黨から、嫌疑をうけて佛國に居たゝまらず、英國に渡つてゐたが、巴里に居殘る老母の安否を氣遣つて、姿をば職人體にやつし、都に歸つて來たのであつた。

昔友に邂逅す

デマーシスは、自分の話をしてから、ナポレオンに向つていつた。

『君は、一體、近頃何をしてゐるのか、君は、何ぞ心配ごとがあるのではないか君の顏は、何うも、普通じやないぞ。川へでも、はまつて死にさうな風が見えるよ。』

『なるほど、君のいふ通り、僕は全く意氣地なしになつてしまつた。川へ身を投げて自殺しようかと考へながら、實はあるいてきたところだつた。僕一人なら、何んな辛棒もするんだが、母親や弟妹のことを考へると弱つてしまふよ。今日は何うして、食つてゐるだらうか。僕から、耳よりな手紙でもきはしまいかと待つてゐるだらうと思ふと、居ても起つてもをられなくなる。……』

ナポレオンとて人間である。貧に惱む苦しみを打ち明けて、そゞろに暗涙を催すのであつた。

ところが、デマーシスは、何思つたか、ポケットを探して金入を出した。そして、それをそのまゝナポレオンに渡していつた。

『こゝに一萬圓ばかりあるから、とつてくれ。これは今のところ、僕には、ちつとも必要がないんだ。困る時はお互だ。これをもつて、マル・セーユの母親を助けてやるがいゝ。』

デマーシスは立去つた。

この親切な友の情に、ナポレオンは夢かとばかり喜び、有難涙にむせびながら友の後姿をば拜んだ。人の情は、かくありたいものである。持つべきは、友ではあるまいか。

ナポレオンは、今一度、友だちに逢つて、禮をいはうと思つて、件の川岸まで毎日のやうに、足を運んだが、つひに、友だちは來なかつた。

星移り年替つて、それから十五年の後、この貧乏ナポレオンは、佛蘭西皇帝となるのであるが、さうなつてから、金を呉れた友だちと偶然のことから逢ふことが出來た。

その時、ナポレオンが、

『何うして汝は、今日までやつて來なかつたか？　あれから、もう十五年になろじやないか。』

といつたら、友のデマーシスは、

『あ、僕は、いままで、君にやつた金などは、いらなかつたんだよ。それで投つて置いたんだ。』

と答へた。

ナポレオンは、いつた。

『あの時の、君の恩は、忘れないよ。僕も、何うかして、その恩返しをしなけりやならん。君の望みに隨つて、世話をするから、思ふところをいつてくれ。』

『ナニ、そんな心配してくれるな、僕はね、君と別れてから、田舍にひつ込んで田畑を耕しながら、君の成功を樂しみにして、まつてゐたのだつた。このさきとて、僕は、百姓が相當なんだから、さう思つてくれ、わるくとつてくれるな。』

『それではね、これが、昔の恩に報ゆる、ほんの志だから受取つてくれ。』

ナポレオンは、幾萬金かを包んで、友だちにやらうとしたが、彼は、容易に受け取らなかつた。

やつとのことで、その友だちをなだめて受取らせ、猶その上、王宮附の花園の支配人に引き立てゝやつた。

この話しは、ナポレオンが、後年セントヘレナに流されてから、よく人にいつて聞かせた。

一〇、暴徒鎮定

負け嫌ひなナポレオンも、時勢には勝つこと出來ず、昨今の不遇に、すつかり悄げてゐた。いつそ土耳其あたりへ出かけて行つたら、うまいことがあるかも知れぬ。――と途轍もない空想に日を送つてゐるのであつた。

或る先輩が、ナポレオンの困つてるのを見て、英國の軍隊にはいつたら何うだと云つたことがある。

ところが、ナポレオンは、英國といふ國は、幼ない時から、大嫌ひな國であつた。また、獨逸とてもその通り、何うしても蟲が好かなかつた。

西班牙も、大きな國だが、これも、あまり芳ばしくない。いろ〳〵と考へた末が、やつぱり、土耳其が面白い、大事を成すは東方にあると、土都へ向けて出立しようとしてゐる時に、巴里の市は、また大騒亂となつたのである。

かういふ時には、めつたに、遠くへは行かれぬと、仕度を止めて、雲行きを、覗つてゐた。それは丁度一七九五年、十月の三日頃であつた。

以前の革命で、佛蘭西は、王黨が敗れて、民主黨が勝利を占めたことは、先きに述べた通りで、當時、共和政府が出來て、憲法が改定されてゐた。

ところが、王黨や保守黨の連中は、なか〳〵新政府の命令に服するものではなく、陰にまはり、夜に乘じて、市民を煽動してあるいた。そこで、とう〳〵、四萬の暴徒が、政府の破壞を叫んで、チユイレリーの宮殿を襲つたのである。

政府の方には、何しろ議會防衛兵として、僅かに五千位の軍隊しかなかつた上に、また司令官といふ人も、無能であつたから、巴里の運命は、叛徒の手一つできめられることになつた。

時に。雪崩をうつて押寄せる暴徒を、芝居小屋の石段で見てゐた一青年があつて、仲れの者に、かう囁いた。

『あいつ等は、どこへ往くのだらうか、僕が、叛徒の大將なら、もの〻一時間もあつたら、お城を圍んで、そして、あの馬鹿な議員どもを追つ拂つてやるになあ……』

かういつたのは、ナポレオンで、同伴はジユノーであつた。二人は、面白さうに暴徒の後になり、先きになつて、見物してゐるのであつた。

暴徒は、聞をあげてチユイレリーの王宮へ近づいた。

國會は、上を下への大狼狽である。取敢ず無能な司令官を貶けて、新たに、バラーを總司令官にした。

ところが、バラーとても、こんな騒動を、目の前に控へては、手の出さうもな

いのに、氣が氣でない。苦しい時の神頼みで、かねて、非凡の手腕に感服してゐたナポレオンが、お祭り見物ぐらゐの氣で、議會のあたりを、うろついてゐるのを見かけて、縋りつくやうな態度で頼むのであつた。

『巴里の有樣は、御覽の通りの次第で、實のところ、この騒ぎを鎭めるに適當な器量を持つてゐる人物は、貴下をおいては、他にない。何うか、鎭定軍の指揮をとつて下さい。』

と、心をこめて嘆願した。

やがて、正式に、ナポレオンは、國會の議長からの依頼をうけて、いよ〳〵承諾をすることになつた。

この時に、かういふ話しがある。

議員どもは、命の親とたのむナポレオンが、あまりに貧弱な樣子をしてゐるので、何うなるだらうと、氣づかつて、

『ナポレオン殿、おまへは、果して政府の爲めに使命を盡すことが出來るか。』

と質問したが、無理もないことであつた。彼は答へた、

『無論、出來ます。

私は、しようと思つたことは、今まで十が十まで成し遂げてきました。いまこの騒ぎです、私は一度、劍を拔いたからには、きつと鎭定して見せます。』

と、きつぱりと云ひきるのであつた。

運は廻り合せといふが、ナポレオンにも、運が向いてきたらしい。

サブロン門といふ大砲は、巴里から少しばかり離れたところに置かれてあつたが、ナポレオンは、この大砲に目を付け、ムラー少佐を遣はして、この大砲を取り寄せ、そして、王宮の前に、据ゑつけた。

それも、二時間か三時間でやつた仕事であつた。彼は、いま、此處にゐるかと思ふと、忽ち、彼處に現はれるといふ風で、その機敏な、働きぶりに驚かぬ者はなかつた。

比びなき天才と、非凡の精力とを有するナポレオンを隊長とする、國會軍の準

備が。かうして、もう、出來てしまつた。

明けて、十月の四日。未明から、太鼓の音が聞こえた。そして、きのふの暴徒が、また王宮をさして押しよせてきた。

ナポレオンは、チユイレリーの城の近くにある、セント、ロッシといふ寺のほとりに、兵を置いて、敵のくるのを待つてゐた。

暴徒は潮のやうに、攻めてくる。罵りやら、喚きやら、もの凄いほどであつた。しかし敵は幾萬來ようとも、烏合の衆に過ぎぬ。と、ナポレオンは思つた。

そして、まんまと、間近に、よせつけて置いて、頃を見計らつて、大砲を、うち出したからたまらない。群衆は一たまりもなく、擊破せられた。

戰鬪の始まつたのは、午後の四時であつたが、六時には、もう、王宮の前は、靜かになつてゐて。たゞ無數の死傷者のみが、うづ高く重なり合つて倒れてゐるのであつた。これで、ナポレオンの名は、一時に、巴里全市に響いた。時に、彼は二十六歳の青年であつたが、中佐に昇進して、內國軍の總司令官となつた。

ナポレオンの名聲一時に高まる

人心を收める魔力

ナポレオンの精勵

昨日までの浪人は、今日は、勳功を飾る將軍であつた。

物見高い、巴里っ子は、この名譽ある若い將軍の顏見たさに、我れも〳〵と、彼が宿所へ集まつてきた。

ナポレオンは、戰爭にかけては、常勝の將軍である。ところが、その外に彼は人心を收める力を具へてゐた。人を魅せつけるといふ魔力をもつてゐた。これが、彼をして、政治上の勢力を得せしめる原動力となつたのである。

ナポレオンの運命は、玆に漸く開けて來た。併し一寸した成功や徒らな賞讃に慢心したり己惚たりする彼ではなかつた。彼は一心に軍事上に關する研究を遂げその上に技倆ある者は黨派の別なく之を擧げ用ひた。餓に惱む貧民をも自ら救つてやつたりした。

或る日のこと、ナポレオンが馬車から下りるところに、一人の貧しさうな女が幼兒の死骸を抱きながら、近づいてきて、自分は六人の子の母であるが、食ふものとてはなく、飢の爲めに、この末の子はとう〳〵死んでしまつた。何うか助け

てくれと、訴へるのであつた。

ナポレオンは、動かされた。彼は涙を浮べながら女を慰めて、恵み金を呉れ、なほ其後の扶助料をも與へる取計らひをしてやつた。

この一七九五年の冬は、巴里市に騒亂がつゞいたので、貧民などの窮狀は、一通りでなかつた。

餓死するものなどが、そろ〳〵噂になると、貧民の一揆が起つて、政府の悪口をいひ出し、金持に喰つてかゝり、いまにも一暴動がおこりさうになつた。

ナポレオンは、手下の兵隊をつれて、貧民窟へ乗り込んだ。そして集まつてゐる群集に解散を命じた。

ところが、漁師かなんかの、かみさんで、でく〳〵肥えた女が、大聲をあげていつた。

『あんなけば〳〵した洋服をきて、すましてゐるものなどのいふことを、きくでないよ。あいつらなどは、自分だけ、たらふく食つてゐれば、貧乏人なんざあ、

何うなつたつて構はないといゝ連中なんだ……』

すると、ナポレオンは、馬の上から、その女に向つて、

『おかみさん、おまへと私とで、どちらがよく肥えてゐるか？』と、いつて笑つた。かみさんはグットつまる。群集は憤き出した。暴動もナポレオンの坐興で事なく静まり、めでたく解散してしまつた。

二、伊太利遠征

佛蘭西の新共和國は、ナポレオンのお蔭で、やつと暴動を鎮定したものゝ飢饉やら、不景氣やら、悪政やらで、まだ安心のところまでは行かなかつた。列國はなほも同盟を結んで、佛國の共和思想を撲滅しようとしてゐる。

ところで、佛國共和政府の唯一の希望といふのは、軍隊の上につながれてゐた丈けであつた。

外征をして、勝利が得られたら、自然、國も治まるだらうし、景氣もなほるだ

らうと考へた政府は、こゝに遠征を實行することにきめたのである。

佛國の强敵といふのは、英國とオーストリアであつた。が、しかし、まづオーストリアにあたる爲めには、獨逸を攻める必要があつた。

そこで、モロー、ジウルダンの二將をして、ライン河を渡らした。それから、また外に、第三軍として、ナポレオンを伊太利に向はしめ、伊太利から、オーストリア軍を擊退せしめやうとした。

出發の際、ある國務大臣がナポレオンを引見した。ところが、見れば、まだ額の白い青年である。伊太利遠征軍の總大將としては、あまりに貧弱であると思つた。

『貴下は、總司令官にはまだちと若過ぎますね』

と、侮辱の態度であつた。

すると、ナポレオンは、

『何ういたしまして、一年たてば私は、老人になるか、戰死するかの二つに一つです。』

と答へたから、大臣も、二の句がつげなかつた。

ナポレオンの出發は、丁度、ジョセフインといふ夫人をもらつて三日目のことであつたが、今は大事の場合故、凱旋の日をば待てといひ含め、愛妻を家に殘して巴里の市を離れた。

途すがら、マルセーユに、母親を見舞つた。

遠征軍の本營たるニースに着いて見ると、古參の將校共が、ナポレオンに不平を鳴らした。

老將の目から見れば、ナポレオンなどは、ほんの靑二才であつたから、彼の下風に立つことを喜ばなかつたのである。將校ばかりでなく、兵士まで、輕蔑してかゝつた。

『何んだ、あれが大將か。まだ口ばしの黃いろい小倅ではないか、馬の乘り方もほんとに、分つてゐないやうだ。驚くぢやないか。

ナポレオン伊太利出征

將軍等ナポレオンを喜ばず

ナポレオンの綽名

大體、あんな人を、長官にするのは、つまり、政府の愚を曝すといふものだ。』といつて、てんでナポレオンを相手にしないといふ氣色であつた。

ナポレオンの綽名は、幾つも作られた。「バラーの寵人」といふのもあつた。「觀兵式の御大將」だとか、「空想家」だとか、「實戰の經驗なき男」など勝手なことをいつて、罵つた。

四面楚歌といふことがあるが、ナポレオンの周圍は、全くそれであつた。

しかし、ナポレオンは決して、辟易しなかつた。元來が、ナポレオンといふ人は鼻つばしの強い人である。彼は、一軍の不和は、失敗の原因となるといふことをよく知つてゐた。それで、何うかして、全軍の兵士將校を威服せねばならなかつた。そこで、最初の閲兵式には、莊嚴な儀式をあげて、斷乎とした宣言を發したのであつた。

ナポレオンの斷乎タル宣言

『諸君、今日の兵法は、實に幼稚なものである。余の見るところでは、兒戯に等しいやうな作戰をしてゐるのである。聞くところによれば、我らが向ふ敵將は、勇敢な名將なさうである。そして、多くの經驗をもつてゐるさうだ。

然し、それ位のことでは、我が軍に對しては、何の功も奏するものではない。何となれば、彼れらの採る兵法は、矢張り舊式なものである。味方は最も新らしい兵法によるのである。

諸君、余の新兵法といふのは、外でもない、最初の突貫で、敵を粉々にしてしまうことである。敵兵が狼狽してゐる間に、突貫は、電光の閃めくやうに、急にやらなければならぬ。』

と、辯舌、鮮かに述べたのであつた。

それからは、將卒共も、ナポレオンの機略威勢に服し、

『彼れは、年こそ若けれ、吾人の長官たる値打ちがある』といひあふのであつた。

ナポレオンは、總大將であつたけれど、食事も、寢るのも、兵士と一緒にし、困難辛苦を兵卒と共に嘗めた。

隨つて、初め、輕蔑してゐた兵士も、掌を返へすやうに、ナポレオンに懷き

『いまゝで、こんないゝ大將はなかつた。』と云ふのであつた。その時、佛國政府の財政は窮迫の極度にあつたので、出征軍に對しても給養も充分でなかつた。それについてナポレオンは、兵士を集めて訓示をした。

『兵士よ、諸君は、裸のやうなものである。政府は、十分卿等に食さへも與へることが出來ない。卿等は、政府の爲めにこそ、働いて居るけれど、何一つもらうものがないぢやないか。卿等の堅忍、卿等の勇氣は、賞讃しなければならぬ。然るに、それに對する光榮も、利益もうけたことがない。

そこで、余は、卿等を、富有な國土、大なる市に案内しようと思ふ。其處に行けば卿等は、富と、名譽と、自由とが得られる。

佛國の兵士よ、その樂土は我が行く先きに、待つてゐる。それでも、卿等は、そこに行く勇氣と忍耐が出て來ないか、』

その聲が、一軍に、響き渡つたとき、恰も電氣に感じたやうに、兵士は、皆涙

を垂れた。

腸の底から、やがて、眞の愛國の念が湧き出るのであつた。肉躍る勇氣が、自づとおこるのであつた。英雄の一言は、よく一軍の士氣を鼓舞したのである。

ナポレオンの一隊は、かうして、イタリアの野に向つたのであつた。

話は、前に戻るが、ナポレオンが伊太利遠征に向つて、巴里の都を發する時、カルノーといふ大將が、ナポレオンにいつた。

『貴下は、伊太利行きの總司令官となつたが、一體、兵糧も、彈藥もない遠征軍である。また政府とても、御覽の通りの内情で、軍用金などといふものは、一文も供給することが出來ないのだから、そのつもりで、やつてもらひ度い。』

『御心配下さるな、兵隊さへあれば、それで充分です。その外のことは、不肖未熟なれど、責任を帶びて、遺憾なく取り計らひませう。』

といつて、出かけたのである。彼は夫等のことに就いて、充分な成算があつたのである。しかし、かういふ事情であるから、大軍を統帥して、はる〳〵伊太利に

向ふといふことは、決して、容易なことではなかつた。ナポレオンの如き天才にして、始めて成し得るところのものであつた。

アルプスの裾野にかゝつた時、ナポレオンは、

『カルタゴの英雄ハンニバルは、アルプスの山を超えたが、我れらは、アルプス山を迂回しよう。』

と呼ばゝつて、アルプスの嶮を廻つて、レモタの山上に馬を立てた。

脚下には、世界の最富國が展開してゐる。全軍は歡呼した。

何處からとなく、ナポレオン萬歳の聲が、谷間に響くのであつた。一氣に、伊太利の野に攻め下つた遠征軍は、四月二十二日、モンドヴイの野にサルヂニア軍を破つた。そして、サルヂニア王をして、オーストリアの同盟から脱退せしめて和議を結んだ。

サルヂニア軍を破る

それから、路をかへて、オーストリア軍に向つたが、合戰の際ナポレオンは、何時も、自ら軍旗をさゝげて陣頭に立つのであつた。そして、戰つて勝たざるな

く、ロンバルヂアを略し、首都ミラノに攻め入つた。

これより先きロヂの戰といふのがあつた。敵は、ある橋を根城として頑强に抵抗したので、ナポレオンは忽ち命を下して橋を渡り敵陣に突貫せよと言つた。餘りに無謀な命令に部下の者は皆躊躇した。味方の腑甲斐なきを怒つた彼は、突然旗手の手から軍旗を奪ひ、自ら先頭に立つて彈丸雨飛の中を物ともせず馬を橋の上に進めた。そこで士卒も俄に勇氣百倍して敵中に突進し、忽ちこゝを占領することが出來た。

主將といふ重任のある身を以て、彼が、斯樣な危險を冒したといふことは、部下をして、非常に感動せしめた。

この時彼れは「小伍長」といふ綽名をうけたほどである。

百戰百勝といふものならば、戰爭ぐらひ面白いものはないかも知れぬ。然しナポレオンの、この必勝は決して偶然や運とかいふものではなかつた。彼の所謂新戰術を用ひた結果に外ならなかつた。

ナポレオンの「新戰術」

ナポレオンの名佛蘭西土に響く

俘虜になつたオーストリアの一將校が、今度の戰爭を何う思ふかといふ問に對して、次のやうな答をした。

『この度の戰爭は、何がなんだか、さつぱり分らない。佛軍には、戰法を全く、解しない若い將校がゐて、今日は、先登にゐるかと思ふと、明日は殿軍、左に居るかと思ふと、右に行つてゐる。自分の居るべき場所さへ知らない。あんな無法者には、迚も叶はない。』

さて、この若いものとは、ナポレオンのことである。分の解らない兵法といふのは、彼の新らしい戰術のことであつた。

戰勝の報が、本國に傳はり、熱し易い巴里市民は、また狂呼してナポレオンの名を賞揚したので、ナポレオンの名は、忽ち佛蘭西の隅々にまで、響くやうになつた。

ところが、人間といふものは、嫉みの心があるものである。あんまりナポレオンの評判がいゝので、政府の主な人だちが、今の中に早くこれを抑へて置かなけ

れば、後日恐ろしいことにならぬものでもないと、餘計なことを考へるやうになつた。

丁度、その頃、ムラーとジユノーといふ二人の將校が、ナポレオンの云ひ付けで分捕品をもつて、巴里に凱旋した。ところが、疑ひ出すと、何んなことでも、疑ひがかゝるものだ。ナポレオンが來ずに、部下ばかり歸してよこすといふのは、てつきり、野心がある爲めだと云ひ觸らすものもあつた。一體、ナポレオンは和議を結ぶにてしも、一々本國政府の意思をきくといふことをしなかつた。專斷に取り極めた。それで、政府では、伊太利遠征隊を二分して、ナポレオンの外に、もう一人、司令官を派遣する策を案じた。そして、このことをナポレオンに云ひ送つた。

すると、ナポレオンは辭職を申し込んだ。然し、いまナポレオンを辭職さしたら、國民が承知しないだらうといふので、却つてナポレオンをなだめて、元のまゝにして置くことになつた。

政治家としてのナポレオンの手腕

ナポレオンは、征服者であつた。けれども、彼はいまゝでのやうな壓制者にはならなかつた。

彼は、解放者であつた。彼の遠征によつて伊太利の舊慣は、大分破壞された。封建制度を破つて新らしい制度を布いた。貴族を擯斥した。無學で、慾深な僧侶を壓抑した。農民の自由を認めた。

それで、伊太利全半島は、何處にも、革命の精神が漲つて、新時代の曙光が現はれ出した。

かうして見ると、ナポレオンは、政治家としても非凡な手腕をもつてゐたことがわかる。

彼は、伊太利に宣言して、我れはイタリア人を救つて、貴族や僧侶の壓制を解き、自由と平等とを與ふる正義の爲めの戰爭をするのであるといつた。斯うして伊太利の大部分は、今やナポレオンの麾下に參じた。

さて一方ライン方面では、モロー、ジウルダン二將軍の率ゐる佛國軍はオース

アルコンの戰

羅馬法王征伐

トリア軍と戰うて大敗した。

そこで、三軍並び進んで首都に攻め入るといふ策は不成功に終つた。ところがラインで勝つたオーストリア軍は、勢に乘じて南下し、ナポレオン軍と相見えることになつた。

アルコンの戰はこれである。この時も、勿論、ナポレオンの大勝利であつた。敵將を虜にし墺國皇后の手づから刺繍した軍旗をも鹵獲するといふ大勝利であつた。

世に迷信ぐらゐお可笑しいことはない。丁度、この戰ひの前のことである。オーストリアが兵員を增して南下するといふことを聞いた羅馬法王は、いくらナポレオンだつて、今度こそは、きつと、うち負かされるだらうと考へたものである。そこで、前の約束を握りつぶしてしまつた。そして、第一の寢言をいひ出したといふのは、佛國征伐の十字軍を起すべしといふのであつた。まだ、その上御丁寧なことは、かういふ奇蹟があつたといふことを言ひふらした。夫れはロレットの聖母マリアの像が涙を流したといつて、愚民を煽動し、ナポレオンに反抗させた。

ナポレオン墺國の首府に迫まる

カンポフオルミオの本條約

ナポレオンは、三千の部下を率ゐて法王領に進み、嘲弄半分に、大砲を二つ三つうつたと思ふと、寢言の御本尊樣は直ぐまゐつてしまつた。

ナポレオンは一日、ロレットの町の小さな寺に、涙を流すといふマリアの木像を見物に出かけた。

成るほど、マリアの木像が大きな涙を流してゐたが。よく〳〵見ると、絲に貫いた硝子の玉が、一づゝ、眼から出てくる仕掛になつてゐた。

遠くから、有りがたいと思つて拜めば、信者には、本當の奇蹟としか思へぬ。

悪い坊主どもは、こんなからくりをして、迷信屋を惑はしてゐたのである。さてナポレオンは、更に進んでオーストリアに攻め入り首府ウイーンに迫つた。そこで墺軍は和を請ひ、やがてレオベンで假條約を結ぶことになつた。

本條約は、カンポ、フオルミオで結ばれる。それまで約半年の間、ナポレオンは

ナポレオンの大抱負

外交上にも天才を示す

いかなる生活をしてゐたかといふに、巴里から夫人のジョセフインを呼びよせてミラノのモンテベロ宮に住んでゐたが、彼は王者の如く、妻君はまるで王妃のやうであつた。

ナポレオンは、隨分莫大な償金をとつて、贅澤な生活もしたが、彼の望むのは富ではなかつた。實に歐洲全土に號令するやうな權勢と名譽とであつた。

媾和談判はなか〳〵捗取らなかつた。外交上の懸引は、あらゆる魂膽秘術を盡しあふのだが、ナポレオンはこの方にかけても天才を示し、何から何まで、手ぬかりなどはなかつた。

外交上の先例とか、儀式とかいふものは、矢張り重大な手續であつた。敵方は強抗に云ひ張つて來ると、ナポレオンは、矢庭に、テーブルの上にあつた花瓶をとつて牀の上に投げつけた。

『そんなことをいふのなら、こつちにも覺悟がある。また戰爭をするのだ。もう三月の中に、この花瓶のやうに、君らの帝國を破壞してやるからさう思ひなさ

十八度の大激戰

れ。』

ナポレオンは、かう怒鳴つた。

こんなことで、老獪な敵方の外交家も、へこたれてしなつて、とう〳〵調印することになつた。

然し、味方にしても、この條約はナポレオンの專斷にやつたことであつたので、佛國政府からすれば、反對を唱へねばならぬこともあつたけれど、さればとて、之を否認するほどの力は固よりなかつた。

ところが、ナポレオンのこの獨斷は、國民からは、非常の賞讃をうくるのであつた。ナポレオンが、この遠征に出かけてから二十ヶ月になるが、其の間十八度の大激戰をして、何時も大捷を獲た。これは、古今の戰爭史中でも、顯著なものである。彼の生涯中でも、これほど立派な戰爭はなかつた。

三、金字塔の戰

ナポレオンの凱旋

ナポレオンは、やがて巴里に凱旋した。人民は、あらゆる熱誠の表示を以て之を迎へた。ところが、政府の方では、何となくナポレオンを煙たく思つてゐる。然し、國民の輿望を如何ともすることが出來ず、形式丈けの歡迎會をリユクサンブール宮に催して、長い間の勞を勞らつた。

出來る丈け謙遜す

ナポレオンともあるべき人間だから、政府の腹の底は、疾うに知れきつてゐる。伊太利に居る間は、一も二もなく獨斷でやつたが、巴里にきては、同じ調子で行かぬ。つまり、悧巧に立ち廻つた。何事によらず謙遜をした。自分の名聲を衒ふやうなこともせず、出來るだけ人目に立たぬやうにしてゐた。そして、專ら、文士とか、學者のやうな人と交際してゐた。外に出かけるにしても、附き添ひもつれずに、地味な馬車で隱れるやうにしてあるいた。

かういふ風であるから、現在兄のジョセフなども、ナポレオンは、もう慾も野心もなくなつてしまつた。これからは、文學か社交に閑日月を送るのであらうと思つたくらゐであつた。

ところが、何うして、ナポレオンはそんな閑人ではない。あくまでも向上を希ふ人であつた。彼の胸は、いつでも、ざわ〳〵騷いでゐるのであつた。

彼は、たゞひそかに鋭鋒を藏め、時の到るをまつてゐるのであつた。政府の方でも、ナポレオンが、今までの活動と、うつて變つて、あまり靜まりかへつてゐたから、かへつて油斷がならなかつた。また、ナポレオンの方でも、政府の心の裏が讀めてゐたから、汐時を見て、持ち出したのは、英國征討のことであつた。

けれども、その頃の英國海軍は、なか〳〵精鋭なものであつた。殊にネルソンといふ名將もゐた。それで、これに當るには、勢ひ海軍力を整へぬばならなかつた。それで、イスパニアと同盟して、その海軍を借りようとしたが、この艦隊もすでに英國艦隊の爲めに破られてしまつた。

そこで、今度は、埃及を占領して、間接に英國を牽制しようといふことを建議した。

埃及の遠征

埃及の遠征は、地中海を渡らねばならぬ。また、埃及は砂漠の國である。おい

それと、出來る軍ではないのだが、こんなことは、大膽なナポレオンによつてのみ出來ることである。

政府の方でも、ナポレオンの威望が一日〳〵と高まるので、嫌氣がさしてゐた。彼を遠くの國にやるといふことは、寧ろ政府の方から望ましいことであつた。そこで、直ぐに話がきまつた。

ナポレオンが三萬五千の兵を率ゐてツーロンを發したのは一七九八年の五月であつた。そして、ナポレオンが、專門の諸學者をこの遠征隊の中に加へたことは、特に注意せねばならぬ。

ナポレオンは、軍をするばかりが能でなかつた。ずつと手をかへて、埃及及東方諸國の科學的研究を、目論んだのであつた。

遠征軍は、途中マルタ島を占領した。少しばかりの守備兵を置いて、ナポレオンは愈々埃及に向つた。

ナポレオン埃及遠征の途に上る

ナポレオンの研究心

マルタ島占領

ところが、英國の海軍は、ネルソンを司令官として、頻りにナポレオン軍を追跡したが、天運がいゝといふものだらう。嵐や霧の爲めに難なく虎口を逃れて、遂にアレキサンドリアに着くことが出來た。

それから近道をとつてカイロに進んだのである。

時は夏、所は埃及の砂漠の上、水もなく、食料もなく、困難は一通りでなかつたので、兵卒は不平を訴へた。砂は歩くことが出來ぬほど燬けてゐた。

ムラーやランヌまで、帽子を地べたに投げて、こんなところへ來たことを悔いた。その内にも、何時しか隊列は進み、ナイル河畔にきて、やつと生きたやうな氣持ちになつた。

『兵士よ、あの金字塔を見ぬか。四千年の歳月は、汝等を見下ろしてゐるではないか。』

金字塔下の感慨

ナポレオンは、馬上に高くかう叫んだ。將卒は共に、ゆくりなくも四千年の昔にかへて、メンフィス王の墳墓として建られた金字塔の雄姿に、暫らくは茫然として見惚れ、いふべからざる感慨が胸に迫るのを覺えた。埃及の國は亡びたけれ

金字塔の戰

ロセッタ石の發掘

ども、埃及の文明は殘つてゐる。ピラミッドの下に、スフインクスの蔭に、悠々たる「時」の流れは、いつまでも、四千年の歴史を語つてゐるのである。泣き度いやうな、慕はしいやうな、夢のやうな、魅力のこもつた尖塔や獅身像の影こそは、たゞ一人の英雄の表現であつた。

巨人！英雄！　何といふ美しい名であらう。

金字塔の戰で、埃及は平定された。時は千七百九十八年七月二十一日のことである。ナポレオンは、政治上の施設の外に、學者をして、古代埃及の研究をさせた。埃及文字研究の鍵となつた彼の「ロセッタ」石の發掘は、この時のことである。ナポレオンは、なほ東方の征略を企てたが、軍中に疾病が流行して思ふやうな成功を見なかつた。

ところが、或る時、一人の英國將校から、一束の新聞を贈られたので、彼は、一晩中一睡もせずに、新聞を讀んだ。久しく聞くことが出來なかつた歐洲の形勢を知りたかつたからである。それを讀んで見ると、いかにも、歐洲の形勢は意外の變化をしてゐた。

コルシカに漂着す

佛本國では、總裁政府が、無能だといふので、反對黨が、機會を狙つてゐるといふのであつた。また、佛軍は、墺露の爲めに伊太利から追ひまくられ、ナポレオンが作つた保護國が大部分、離叛するといふ始末であつたので、彼は、このまゝ埃及に滯陣すべき時でないことを知つた。

一三、第一統領

海上は敵艦の横行であつた。ナポレオンは埃及から帆船で、乘り出した。一月あまりも海の上にゐて、やつと風の爲め吹き流されてついたのが、偶然にも故郷のコルシカであつた。アジャシオの市民は、英雄が入港したといふので、大した歡迎である。この土地から夜逃げをしてから六年になるが、彼は今や、押しも押されもせぬ世界一の武將となつてゐるのである。

さきに、彼を追ひ出した島人も、今日は同郷の誇りとして、萬歳を唱へた。市

巴里までの歡迎

長や、物持ちや、友人や、知りあひから、招かれたけれども、今のところ、そんな暢氣な祝ひ酒をのんで居られる場合ではなかつたので。悉くそれ等の厚意を辭退し、直ちに船に乘り、對岸フレージュに向つて、急いだ。

港近くまでくると、佛蘭西國民は、港中の舟をかり集め、沖合まで列をつくつてナポレオンを出迎へたのであつた。歡聲があがる。寺々の鐘が鳴る。街路は、萬歳の聲でみちた。

十五年の後には、この歡呼熱狂にひきかへて、ナポレオンは、この港から、エルバ島に流されるのであるが、思へば、人の運はめぐり廻せ、流轉は世の常である。

これから巴里までの旅は、何處も彼こも、ボナパルト萬歳で一杯であつた。まるで國王の通過でもあるやうな騒ぎであつた。

提灯がさげられてゐる。國旗が飜へる。花火をあげるといふ光景であつた。巴里では、英雄の歸來を紀念するために、「勝利街」といふ町通りが出來た。國會議

員の一人で、あまり有頂天になつて頓死したものさへあるといふことであつた。

國民の輿望みなナポレオンに集る

ナポレオンを待遇すること、全く佛國王にでもするやうであつた。

巴里の槍舞臺は、またいかに變つて行くだらうか？

巴里の政府は不人望極まるものであつた。

なる程、

元よりナポレオンは、功名を好むものである。機會がありさへすれば、佛國の政權を握つて歐洲に號令を發して見たいと案じてゐた。

はる〳〵と埃及から歸つてきたといふのも、決して無意味ではなかつた。ナポレオンには、國民の同情が集まつてゐた。『ボナパルト萬歳』の聲と、『我が國を救ふ人』といふ歡呼とは、全くそれを裏書するものであつた。

彼れには、生命をも投げ出す軍隊の援けがあつた。

或る日、ナポレオンが、部下の將士に向つてかういつた。

「諸君は、余を助けて、國家を救ふであらうか」

その時、全軍等しく、「然り」と答へた。軍刀は高く振りかざされた。ナポレオ

ナポレオン三統領の一人となる

ンは、愈々本舞臺の立役となるべき時がきたのであつた。

「梨は熟した」

ナポレオンは、奮然として新政府の組織を決心し、運動は計畫通り進行した。

それも一月足らずの間である。ナポレオンは、遂にルクサンブール宮の一室に、フランス國の統治權を總攬することゝなつたのであつた。

二人の同僚はあるけれど、それはほんのお相伴役に過ぎなかつた。それもその筈である。ナポレオンは、英雄であつたから。

ナポレオンは、統領となると、かういふ敎書を出した。

『これからが新時代を造るのだ。過去の惡いことは忘れてしまはねばならぬ。ただ善いことばかり記憶すればよい。』

彼れは、着々と秩序の恢復と共に、いろ〳〵な施政を布いた。そして佛國をして少くとも世界最大强國たらしめんことを期した。

大ナポレオンの理想は、世界的大帝國を作つて、その帝王たることにあつたの

ナポレオンの精勵

で、國民は、ナポレオンの執政によつて、始めて安心した。

彼が非常な精力家であることは、前にも言つたが、統領になつても、彼は毎日十八時間の執務をこつ〳〵と働らいてゐた。

「諸君、いま、やつと二時だよ。も少し何かやらう。そして國家から報酬をもらはう。」

國民、ナポレオンの善政を謳歌す

ナポレオンは、よくかういつて、役人を勵ました。

佛國の内情は、一變した。ナポレオンの善政は、次のやうなことに表はれた。

ラファイエットといふ人が一八〇〇年に、書を著はして、

『我が國には、多くの乞食があつた。また餓死するものも少なくなかつた。然るに、今や百姓は富み、土地は耕され、女はよい衣服をきてゐる。』

と記した。

瞬く間に重税は廢せられ國民は裕福になり、産業は奬勵せられて經濟狀態が順調になつた。革命前から見るとフランスの狀態は全く一變して了つた。國民が偏へにナポレオンの政治を謳歌するのも、素より當然のことであつた。

一四、アルプス越とマレンゴーの激戰

英墺ナポレオンの親書を拒む

ナポレオンは、統領となるや、列國に對して好みを通じた。

ところが、英墺の二國だけは、强硬に其の親書を拒絶したのである。全歐を併呑しようとする大望は、鬱勃として彼れが方寸の間に蟠まつてゐたが、いまのところ平和的施設で忙しく、内亂や外戰で血を流すことは、國民の輿論でなかつた。

ナポレオン墺國に向つて兵を動かす

然るに、大英國が主となつて、ひそかに第二回の對佛歐洲同盟を組織したときいては、最早や容赦することは出來ぬ。

熱情に富む佛國民である。その佛國の名譽と存立を全うするために、ナポレオンは、また自ら遠征の主將となつて都を去ることになつた。

モロー將軍をしてライン方面からオーストリア軍を擊たしめ、自分はイタリア

を恢復して、墺國に侵入しようと志した。實に一八〇〇年の五月のことであつた。

ナポレオンのアルプス越はこの時のことである。サンベルナルドといふのは海拔八千尺もあるところで、到底人馬の通行することの出來ぬ天嶮であるが、ナポレオンは、態とこゝを選んだ、まづ工兵を遣つて調査をさしたら、通過はどうあつても不可能だといふことであつた。

ナポレオンのアルプス越

すると、ナポレオンが、

「不可能といふ言葉は、我が字書にはない。」

といふ有名な詞を以て、全軍を勵ましながら、出發したのである。見上ぐれば、雪崩が今にも落ちてきそうだ。見下す脚下は、氷の谿、身を切るやうな寒い風が吹く。凍死するもの、病氣になるもの、斃るゝものも少くなかつた。

「不可能の語は我が字書にをい」

あゝこの偉業こそは、ナポレオンでなければ、克く成し得ないところである。

ナポレオンは、灰色の外套にくるまつて、驢馬にのり、一人の青年案内者をつ

れて、愉快さうに話しをしながら登つて行つた。

この難澁な山で、笑ひ聲が聞こえる。

大將の元氣に、勵まされて、士卒も元氣、苦痛を忘れて、軍歌を歌ひ出した。

ナポレオンは、高く叫んだ。

『兵士よ、進め、山と雪とに勝ち、そして後、平原と敵とに勝たなければならぬ。』

八日を費して一行は首尾克くアルプスの嶮を越えた。そして俄かに墺軍の背後に出た。墺軍の驚きは一通りでなかつた。これからマレンゴーの大會戰となるのである。

アルプス越で疲れてゐたらうし、兵も少なかつた。運もわるかつた。それで、一時、ナポレオン軍は旗色がわるくなつて退却せねばならなかつた。

オーストリア軍は最早や自分の勝利を疑はなかつた。たかをくゝつた彼等は少し氣を緩めた。が、ナポレオンの妙計は此の刹那に生きたのである。彼は精鋭を

マレンゴーの大激戰

すぐつて死物狂に敵陣に突擊させた。敵は俄かの襲擊に狼狽して敢なくも潰走しなければならなくなつた。又しても佛軍は際どいところで大勝した。兩軍の死傷二萬、唐紅の血潮を物すごく照しながらマレンゴーの夕日は暮れ初めた。

マレンゴーの戰は、小氣味よい戰であつた。一旦退きかけたナポレオンが直ぐに轡を返して、縱橫無盡に荒れまはるところ、利劍の冴えと兵法の妙とが坐ろ想ひうかべられるのである。

この戰で、ナポレオンは、輕傷をうけた。彼は、この時着けてゐた帽子や服や軍刀を大切に保存しておいた。

皇帝となつてから、皇后とつれだつて、このマレンゴーの古戰場を訪れたことがある。その時は、かの記念の軍服や帽子をつけていつたといふことである。彼がセントヘレナの絕島で最後の息を引きとつた時も、その遺骸の上には、この軍服が被けられてあつた。

ナポレオンが出征してから四十日に、伊太利回復し、とう〳〵オーストリア軍

を負まかして巴里に芽出度く凱旋した。市民は狂氣のやうに彼を歡迎した。彼の名聲はます〳〵高くなつた。

英墺と和睦す

一八〇一年二月ネヴィールの條約でオーストリアと和し、フランスはライン河岸に領土を擴げたが、ついで、一八〇二年三月、アミアン條約で英國と和睦をした。

一五、平和の施設

フランス國民血に飽く

今やフランスの國民は上も下も皆長い間の革命擾亂に飽いた。血を流すことは熟々厭になつた。そして平和を希望してゐたのである。

賢明なる大ナポレオンは、素より國民の輿望、民意の奈邊にあるかを知らぬ筈がない。彼は今フランス國民の民力を休養し國力の充實を計る時と思つた。

ナポレオンの平和的施設

かくして國民擧つての希望である平和的施設は、着々とナポレオンの緻密な頭腦に依つて計劃せられ、敏活なる手腕によつて直ちに實行に移つたのである。

ナポレオン法典の編纂

平和的施設の第一として彼が最も心血を注いだのは法律の制定である。革命時代擾亂時代には、佛國の法律は滅茶々々であつた。あつて無きが如きものであつた。

在來の法律に不滿であつた彼は、統領となるや直ちに自家の理想を以て新法律の編纂を企てた。一千八百年には數多の法學者を擧げて、この草案を起稿せしめた。

諸君よ。憶ひ起せ。ナポレオンが年少の學校時代から偏屈と侮られ、變物と嗤はれ乍らも、むだな交際から遠ざかつて課業の餘暇には只管たゞ讀書に耽つてゐたことを。あらゆる方面の書物を讀破した彼は、當時より法律に對して一家の意見を持つてゐた。今や、その効果を著々と實現されて來たのである。

やつと草案が出來上つたので學者達はナポレオンの檢閲を求めた。彼は綿密に夫を檢べた。そして幾度か會議を開いて嚴正に之を批評し、訂正した。かくして四ヶ年の日子を費し遂に出來上つたのが不朽の名を得たる「ナポレオン法典」で

あつた。

實に「ナポレオン法典」は、ジャスチニアン帝の羅馬法と共に古今稀れに見る立派な、完全な法律といはれてゐる。現今諸文明國の立法の淵源や基礎となるものは、これらの大法典に據つてゐるところが多いのである。

「ナポレオン法典」の主眼とするところは、これまでの虐政や惡い制度を根本から覆すことにあつた。當時、國民の傾向が一般に永い間の戰亂に倦いて、只管平和を望んでゐたことは前に述べた。逸早く之れを看取した彼は直ちに軍服を脱ぎ、指揮刀を鞘に藏めた。そして國利民福を精神として營々平和の施設に苦心したのである。

この法典によつて佛國革命の根柢を成した最も美しい精神が、世界の文明人種間に健全に普及し、また永遠に確立したことを思へばナポレオンの遺業も亦偉大なものでないか。

アミアン條約以後、平和を保つた時日は極めて短く、やがてまた列國と兵火の

間に相見ゆることになつたのであるが、この短日月の間に、ナポレオンの平和的施設は彼の計畫んだ通り著々と出來上つて、瞬く間にフランス社會は一新し眞に堅實な國家となつたのである。

フランス社會一新

ナポレオンの卓絶せる識見と偉大なる才幹とで出來上つた平和的施設は茲に一一擧げて數ふることが出來ないほどである。商工業、農業は固よりのこと或は美術、文學、科學の進歩を奬勵し、又國民教育のことなどあらゆる方面に亙つてゐる。

倉庫充滿す

農産の如きは從前に倍加し、革命のために荒廢した土地は再墾された。そして今までの樣に僧侶や貴族が苛酷な年貢を絞ることも出來なくなつた、農民の倉庫は何時もいつぱいであつた。農民に對して苛酷な役人があるとナポレオンは、いつも斯う云つて戒めた。「國庫に納めて置くよりか、百姓には自分で自分の作つたものを仕舞はして置く方がよい。」

と。彼が農民を大事にしたことは、之れでも分る、

商工業の發達

又商業上にも彼の施設は大なる活氣を添へた。彼は他日事ある日を慮り、全力を盡して內國生產の增加を圖り、外國商品の輸入を杜絕することに努めた。

工業上とても其通り、學者を優待して研究させ、いろ〳〵の化學工業や機械學が急速の進步發達を遂げた。その他一般に公共事業にも出來る丈けの改善を加へた。道路や橋梁、運河には費用を吝まず金をかけて國人の便を計つた。特に面白いことはナポレオンが好んで大土木を興したことである。彼が嘗て有名な埃及の役に宏大なる金字塔を見上げて、「兵士らよ、彼の金字塔より四千年の歲月が汝等を見下してゐるぞ」と叫んだ、あの旣往の感慨が、今も彼の胸に深く刻まれてゐたのである。自分とても何か我が威名を後世に傳へるものを建てゝ遺したい。これがナポレオンの大土木を好んだ所以である。

ナポレオン盛んに工を起す

忘れ得ぬピラミッド

セーヌ河に架せる橋梁の壯美、老兵院の空中に聳ゆる尖樓の巍々、さては巴里宮殿の輪奐の美、何れも人目を炫耀かすばかりのものであつた、その他立派ないろいろの建物が今日に遺つてゐるものも少なくない。

又フランス國家永遠の計を考へてるナポレオンは、教育上の事に最も深い注意を忘れなかつた。今日のフランスの學制も、その實質に於ては、ナポレオンの定めたまゝのものである。日本が明治五年に始めて發布した教育令も、全くこのフランス式を採用したものである。

次に兵學校を改良することになつたが、ナポレオンは少年時代に、幼年學校や兵學校で貧乏者だといふので仲間から大に輕侮せられ、虐待を受けた當時のことを好い意味に於ていつも忘れない。そこで彼は少年時代から考へた通り實施して昔の學校のやうに生徒等が奢侈や優弱であることを嚴禁した。

こんな風であるからナポレオンが教育に熱心なことは非常なものであつた。やがて第二のフランス國民となつて、彼の築いた此の國家を背負つて立つべき小國民を教育するに、ナポレオンは誰も及ばぬやうな深い注意を以てした。ある時こんなことがあつた。一人の少年が家庭に在つて獨學で勉强してをつたが、十分自信があつたので國立學校へ入學を志願した、ところが學校では、そんな獨學の勉

ナポレオンと一少年

強では幾ら出來が良くても入學は許されぬと斷つた。少年は非常に落膽した。ところが、このことがどういふわけでかナポレオンの耳に入つた。そこで彼は早速彼の少年を面前に呼んで自ら試驗してみた。彼の少年は少しも怖ぢ畏れるところもなく、ナポレオンの試驗に答へた。彼は喜んで微笑みながら書面を書いて彼の少年に渡しながら言つた。

「お前は仲々感心な子供じや。これを持つて學校へ行け。入學を許してやる。これから、よく精出して勉强せい。そして偉らい人になれ。」

少年の喜びは奈何んなだつたらう。鬼の首でも取つたつもりであつたにちがひない。

かくしてちよつとの間にナポレオンの施した善政の結果は直に現はれて來た。彼の執つた施政方針が萬事民心本意であつたから、その人望は日に日に高くなり、民心はいよ〳〵歸服し、老いたるも若きも、嘻々として其德澤の深きに浴したのである。

フランス國民、平和を謳歌す

ナポレオンといへば、直ぐに流血の慘事を想ひ起すのが常であるけれども、彼は單に武斷一遍の軍人に過ぎないと思ふものあらばそれは甚しい皮想の觀察である。

ナポレオンは成る程近世の最大軍人であつた、世界今日に軍備と戰術との基礎は彼によつて置かれたといつても過言ではない、けれども公平な歷史的の立場から見て彼の功業として百代の後まで其の利益を傳へるものは、平和的施設であつて、こゝにナポレオンの眞價があるのである。

ナポレオン自身も單に「戰爭の天才」としてばかり後世に其の名を遺すことは餘り好んでゐなかつたらしい。夫れは彼が晩年セント・ヘレナの配所で、

『朕が四十餘度の合戰に勝を博した功名は唯ワーテルローの一敗で、跡形もなく消されて了つた、けれども朕は我が手に法典を持して百代に生きるであらう』

と、或る人に述懷を物語つた、其の詞でも判かるではないか。

ナポレオンといへば直ぐに文明や人道の敵であるかの樣に思ふ人も少くない

が、自分は、これらの皮相な批評を下す人々に對し、ナポレオンのために切に寃を雪ぎたいと思ふのである。

一六、フランス王黨と英國との陰謀

ナポレオン衆望により終身統領となる

宛然たる佛國帝王

曩にナポレオンが第一統領に擧げられてから二年の歳月が流れた、この間に國民の信頼と輿望とは益々一身に集まつて來た。

斯ういふ風でナポレオンの勢威は旭日昇天の有樣で、すること成すこと盡く時宜に適つて成功しないことはなかつた。だから曩に十年を以て第一統領の任期と定めてあつたのを、一千八百二年八月議院の提議に依つて國民から投票を募つた。その結果は三百五十萬票といふ大多數でナポレオンは遂に終身大統領となり又その後繼者を選ぶの權限をも與へられたのである。

こゝに於て其の名こそ終身統領であつたけれどもチユイレリー宮殿の中に嚴然と控へゐる有樣は、その威權すでに宛然たる帝王であつた。

ナポレオンに對する不平黨

英國の陰謀

人望家の裏には、下らぬ不平家が潜んでゐるのが世の常である。そして其華々しい成功を嫉み恨んで、何とか彼とか、つまらないケチをつけて之を押倒さうとする、もとより小人輩のすることである。

ナポレオンの場合も此の例に洩れなかつた。フランスの國民を擧げて、みなナポレオンの政治に隨喜してゐるのを見た、王黨やジャコベン黨の人々は不平と憤懣とに堪へなかつた。

こんな有樣でナポレオンに反對な黨派や不平の連中が、いろ〳〵な陰謀を企てた。

玆に陰謀にとつては、もつてこいといふ都合のいゝことがあつた。それは何であるかといふに、英國が密かにフランスの陰謀派に加擔して、陰に陽に非常な助力を與へていたといふことであつた。

アミアンの條約このかた、フランスは表面二三年の平和を得て、その間に國内の實力を增した。それと共にナポレオンの非凡な外交的手腕によつて、國外に及

イギリスとフランスとの爭點

ぼす勢力も大いに伸びたのである。もはや大抵の國々は殆どナポレオンの眼中になかつた。

そこでナポレオンの絶大な威力でフランスが急に發展したのを見てゐる英國は、さあ心配でたまらない。英國にとつて、自國の發展は、たゞ殖民政策による外はない。夫れはフランスが、どうしても邪魔である。フランスを壓へるには飽くまでナポレオン一人を仆さなければならないといふことになる。

英國ナポレオンの暗殺を圖る

そこで英國政府は、自分の國に亡命してゐるブルボン王黨を煽てゝ、ナポレオンを暗殺させ、フランス國内に亂を起させようとし、その陰謀を助くるために、英國政府は運動費を與へたり、或は船を給したりして、樣々な便宜を與へたのである。

彫刻家の陰謀

ところで諸所に、いろ〳〵な陰謀が計企せられてゐたが、第一にこんな事件が起つた。當時コルシカ人でセラッキーといふ有名な彫刻家があつた。この男はナポレオンが嘗てミランにをつた時代に知己であつたが、ある時セラッキーはナポレオンを訪ねて『閣下は今や終身統領といふ名譽ある身分に出世せられたが私も閣下の昔馴染といふ緣もあることだから何卒閣下の肖像を彫刻させて頂ければ私の名譽は此上御ざいませぬ』と申し出た。ナポレオンも、すんでのことにセラッキーの陷穴に陷るところであつたが、その願出で方がいかにも可怪かつたし、又劇務の裡に安閑としてモデルなどになつてゐる暇もなかつたから、いやだと言つて膠もなく斷つた。若しナポレオンがウッカリ彼の願を聞屆けたなら、夫れこそ由々しい一大事が持ち上るのであつた、ナポレオンを暗殺しようといふセラッキーの計畫は見事失敗に終つた。

爆發兇行の未遂

又ある冬のこと、クリスマスの御祝ひでナポレオンは樂劇に招待せられた。そこで馬車を軋らせながら劇場へ向つた。馬は足並揃へた蹄の音を戛々と鳴らしながら或る靜かな小暗い街路を曲つて、二三間行過ぎたところ、往來にあつた撒水馬車が轟然たる大音を發して爆發した。黑煙が凄じく渦卷いて四邊は一面濛々、ソレ謀叛人だ、曲者だと上を下への大騒動の中に近衛兵の一人は手傷を負ふて倒

れてをり、その乗馬は卽死してゐる。そのうちに警官が走せ集まり調べて見ると撒水馬車と見えたのは實は爆發物だつたのである。これも、も少しのところでナポレオンの身體は微塵に摧けるところであつたが、際どいところを免れて、馬車は逸早く、その場を去つたのは實に僥倖であつた。

さて、その兇行者は誰であるかといふに、英國宰相ピットの廻し者やルイ王に屬してゐる王黨の陰謀者であつた是等の兇徒は間もなく捕へられて、何れも死刑その他の重刑に處せられた。

ナポレオンに虚隙なし

大仕掛なナポレオン暗殺黨

こんな騒ぎがあつてからは、妙なもので、ナポレオンに對する賛美、同情の聲が却つて以前よりも盛んになり、王黨やジヤコベン黨は益々一般國民に忌み嫌はれることになつた。

英國は、いろ〳〵の謀略を廻らしてフランスの不平黨を敎唆し、何とかしてナポレオンの暗殺を實行させようとしたが、外面は油斷してゐる樣に見せてゐるナポレオンには實際虚隙がなく、到底乘ずる機會がなかつた。

その中、英國では、一千八百三年主戰派のピットが再び内閣を組織することになつた。例によつて其の殖民政策が唯一の主義であつたから、ナポレオンが苦になつて堪らない。そこで一方では、その最も恃とする海軍の力で沿海の防備を嚴にし、またピットの有名な外交手腕で大陸諸國をして對佛同盟を作らせ、又他方には愈〳〵大仕掛の方法を構じてナポレオン暗殺を計つた。

先づ英國政府では密かに巨萬の資金を陰謀家の連中に與へて、自由にナポレオン暗殺の謀略を授けたが、恰度その首魁でジョルジといふ男が難を避けて英國に

大陰謀暴露す

遁れてゐた。こゝに又嘗てはナポレオンの部下に在つて武名を揚げ、後に王黨のために加擔して、ナポレオンに逐はれて南米に遁げてゐたピセグリヴといふ軍人もこの陰謀に加はり、窃に歸國して、ジョルジなどと氣脈を通じてゐた。

夫れは兎に角萬般の準備が成り、機は熟したので首魁ジョルジ其の他一團の陰謀家を乘せた英國軍艦は、密かに出發し、一行はノルマンデーの海岸に上陸した、そして彼等は他の眼を忍んで晝は山野に隱れ、夜は間道を潛み歩いて漸つと巴里に入つた。ピセグリヴその他の徒黨も一所になつて、密々計畫を凝してゐたが、つまらぬことから黨の中で不和が生じ、遂に謀が洩れて了うた。嫌疑者が續々拘引されて尋問を受けたが、ある軍醫の白狀で隱謀がすつかり暴露した。その計畫が如何にも大げさだつたので、ナポレオンの待從が『實に恐ろしい隱謀だ』と言つたところが、ナポレオンは『これしきのことが恐しいか。若し予が今恐れたらフランスは滅亡の日が來るぞ』といつて叱つたそうである。

ピセグリヴは審問を受けても口を緘して何も言はなかつたが、唯『何人に賴まれたのでもない。唯ブルボン王家の爲に予が此陰謀を企てたのだ』と答へて健氣にも獄中に自殺して了つた。

ジョルジ等の一派は勿論死刑に處せられた。

これで兎に角、大仕掛の暗殺事件は一先づ落着を告げた。『このナポレオンの血は、少くもフランス國家のために燃えてゐなければならん。予はブルボン等に忘れがたき教訓を與へてやらう。予は野良犬のごとく街路で銃殺されてよいものか』

と。これが暗殺事件に對するナポレオンの衷心の叫び聲であつた。

一七、フランス皇帝

度々の陰謀未遂事件があつてから、ナポレオンの名聲は、いよ〳〵高く、人望はます〳〵加はつて來た。國民は、ナポレオンが數度の危難を免れた僥倖を喜び合ふと共に今やナポレオンは、どう考へても無くてならぬ唯一人の人となつた、彼

なくてならぬ唯一人

がなかつたならば、フランスの運命は、どうなるであらう。若しナポレオンの身の上に萬一のことでもあればフランス國家は革命時代のやうに再び安寧秩序を紊して混亂たる狀態に返らねばならぬ。その時は英國をはじめ外國は喜ぶであらうが、僅かに國の礎を建て直したばかりのフランスは一體どうなるのか。

ナポレオンが再建した此のフランス國家を支へてゆくものは、唯彼の力ばかりであつて、彼の生命が法律や治安を保障して呉れるのである、といふのが當時上下を通じての輿論であつた。

ナポレオンを皇帝に推す

そこで元老院は早速ナポレオンを佛國皇帝たらしむることの動議を提出した。すると、立方院、參議院など、いづれも滿場一致で贊成を議決した。これがいつしか一般に聞え、兵士有權者會議院みなナポレオンが速かに王位を踐み、佛國を安んぜしむるやうにとの意見で、或は新聞紙に、演說會に、盛んなる輿論を喚起した。然るに保民院の議員カルノーやラファイエットなどの少數者が輿論に反對し出した、そのいふところは、

『如何に功勞があつたからとて、ナポレオン唯一人に自由を與へるのは正當でない。』

との意見で熱心に抗辯したが、元よりフランスは、上下ともにナポレオンを神の樣に尊崇してゐるのだから、誰一人カルノーなどの議論に耳を傾ける者もなく、その反對說は冷罵の裡に葬られて了つた。

そこで、元老院は國民全體の代表者になり、公然ナポレオンに對し、

『此際一刻も速かに皇帝の位に附かれ、民心を安んじて野心家を壓服して下さるやうに。』

と勸告した。

ナポレオンは、素より時勢の成行を知らぬ筈がない。然し、政體を變更するのは容易なことではない。皇帝になつて、どんな事變が起るかも知れぬと考へてゐる、彼は輕々しく動かない。けれども國民の輿論は矢の催促であつた。

終に卽位問題は國民の投票によつて決しようといふことになつた。で早速全國

オポレオンの承諾

の有權者に卽位問題の可否を投票せしめた所、否とする者は實に二千餘名、可とする者は二百五十餘萬、殆ど擧國一致の勢でナポレオンの卽位が可決された。

この時ナポレオンが謹嚴な態度でいふには、

『フランスの幸福は常に我が幸福と離れてはならない。卿等は予が帝位を踐むことを以てフランスの福利であるといふならば、予も喜んで帝位に卽であらう。たゞ予は恐れる。もし我が子孫に不肖の子出でて、フランスに悔を致さしむることあらばと。他日我子孫にして國民を保安するに足らぬものがでたなら、予が靈は必ず之を棄てるであらう。』

ナポレオン第一世

と。

是に於て、愈々公然とナポレオンは佛蘭西皇帝の位を踐み、ナポレオン第一世と稱し、皇統は長へにボナパルト家に傳はるべしと宣言した。これ一千八百四年五月十八日のことである。

顧れば、革命始まつてから僅かに十五年、今やフランスの全國民は共和國を

ナポレオンの追憶

將來の大抱負

葬つて、新たに生れ出た帝國の前途に對し、歡呼して祝福を祈つた。

フランスは今や帝國となつたのである。

あゝ、此前後のナポレオンの胸中はどんなであつたらう。彼は此頃の目のまわるやうな忙しさに勞れて、安樂椅子に身を横たへた時、定めし二十六年前の冬のことが、ゆくりなくも思ひ出されたであらう。

僅か九つになるオポレオンが、兄のジョセフと一緒に父のチャールスに伴はれて思出のつきぬ、すみなれた島を後にし、ふるさとの島影が見えなくなるまで眺め入つた時、その小さい胸に「コルシカ獨立」といふ薔薇色の未來を朧氣に夢みた、あの少年時代。それからオータン時代、ブリエンスの幼年學校時代……

オポレオンは今日までの自分を思はずも回想して、無量の感慨に打たれてゐたが、愕然我れに歸つた時は、更に將來の大抱負を胸裡に畫いたのである。

自分は今三十五歳だ。人間は意志の力でどうでもなる。少年時代に夢想してゐたコルシカ獨立も實現せられたではないか。青年時代に望んでゐたフランスの主

權も今は目的を達したではないか。自分はまだ若い。何につ!!これからだ。英國がなんだ。ピット何程のことやある。今に見よ。歐洲を征服して了ふばかりでは物足らぬ。世界を統一して見せるぞ。

と。かゝる雄大な抱負と。勇猛な意志の力があつたからこそ、あんな大業が出來たのである。六尺に足らぬ人間一個の能力も偉大なものではないか。

一八、英佛間の風雲

茲に愈々ナポレオンの戴冠式を述べる順序となつた。功勞ある文武官には嚴肅な宣誓式を行つて、レヂョンドヌヌルの榮號章を授けた。これは皇帝の肖像を刻んだ十字形の勳章で、特功のある者に授與する一つの爵級である。

それからナポレオンは、皇帝として陸海軍を檢閲し、且つ功勞ある者に勳章を授けようといふので、當時英國征討軍の本營たるブローニウに向つて出立することになつた。

ナポレオンが戴冠式も濟まさずに急遽ブローニウに向つたのは何故か。

こゝに少々前に遡つて說かねばならぬことがある。

一千八百二年、フランスは英國とアミアン條約を締結して一旦歐洲は平和の光に浴することが出來たが、前にも述べた通り、英國は殖民政策の上から、飽くまでフランスを仆さなければ一國の發展は到底望まれぬ。だから條約を結んだものの、始めから履行しない。ナポレオンとても、素より殖民政策の發展が本來の希望であるけれど、國內の平和施設が、もつと急務であつたから、穩やかに條約を守つた。英國は之に反して始めから條約を無視して勝手氣儘に振舞つてゐた、そこで、ナポレオンも非常に怒つたが、今國內の充實を計つてゐる場合、なるべく穩便に事を解決しようと思つて、佛國駐在の英國公使に抗議を申込んだが、この公使は非常にナポレオン嫌ひであつたから、すぐさま本國政府へ報告して、自分はナポレオンのために甚大なる侮辱を蒙つたなどと、事々に非難讒謗の辭を極めては本國へ報じたので、英國では却つてナポレオンを攻擊した。そしてまたフラ

ンスの王黨を煽てゝ、ナポレオンを暗殺しようと計つてゐた。

こんな風であつたから英國とフランスとは調和しよう筈がない。ところへ英國では、その港灣に入つて來た數百艘のフランス商船を無理に拿捕して、その貨物を沒收した。こゝに至つて、さすがのナポレオンも遂々我慢が出來なくなつた。恰度そのとき、英國では内閣が更迭した。代つて首相になつたのは誰あらう。戰爭好きのピットその人である。いよ〳〵以て兩國の平和は破裂し、一千八百三年五月、兩國の公使は各々國旗を卷いて駐劄地を去り、宣戰が布告せられた。

兩國公使國旗を卷いて去る

そこで英國は早速曩のアミアン條約を全然放棄して、今日までの殖民地を再び占領し、今にもフランスを攻擊するの準備が出來上つた。

そこでフランスでも、ナポレオンは直ちに英國征討の大本營、及び海軍根據地として、ブローニウ港を選定した。

ブローニウ港

時を移さず佛國艦隊がこゝに集合した。

ナポレオンが、光榮ある戴冠式を延期して、俄かにブローニウに向つた理由が

壯大なる分列式

始めて讀者諸君に合點が行つたらう。

ナポレオンは文武百官を率ゐ威風堂々ブローニウに到着した。

やがてスウル元帥指揮の下に八萬の精兵が分列式を始めた。それが了ると功勞ある將士が呼出されて、ナポレオンの手から一々榮號の勳章を授與された。

此壯嚴な光景を見て軍隊の士氣は益す盛んに、將士の眼は希望と歡喜との光に輝いた。

これが終ると大砲が鳴る。軍鼓がうち鳴らされる。喇叭が吹き鳴らされる。誰の口からともなく

『皇帝萬歳』

の聲が潮の樣に起つた。いろ〳〵の歡喜がゴッチャになつてナポレオンの身を包んだ。その響は山から谷、野から海へと衝を打つて轟き渡つた。

七月の日は晴れ輝いて、空には一つの雲もなく、海上からは涼風が吹いて來る、その裡に、劍戟や軍旗が眩く動くのを、瞬きもせず眺め入つたナポレオンの得意

はどんなものであつたらう。

次に海軍の檢閲式が行はれることになつた。

その當日は前夜から暴風雨が吹き荒れて中々獣みそうにもなかつた。それにも拘はらずナポレオンは豫定通り多くの元帥を隨へ白馬に跨つて出掛けた。當日の指揮官たる海軍大將ブリユイは、ナポレオンの面前に出て

『まことに遺憾ながら、本日は御覽の通りの天候ゆえ、到底も觀艦式は擧行するわけにゆきません。』

と申し出た。

ナポレオンは頗る氣嫌を損じて

『卿は、あれしきの暴風が恐ろしいのか。實戰だつたら恐ろしいですむか。速かに朕の命令に從つて船を出されよ。』

と促した。すると大將は恐るゝ色もなく

『陛下は小官が何故に命に從はざるかを知らるゝでありませう。前途大事を控へてをります今日、貴重な士卒を徒らに犬死させることは小官として到底忍び能はぬところで御座ります。』

ブリユイ將軍皇帝の命を奉ぜず

ナポレオンは怒りに燃ゆる眼をブリユイに向け聲を勵まして、

『朕の部下たる卿は唯朕の命令を奉ずれば夫れでいゝ。結果の如何は獨り朕に關す。速かに我が命に服せよ』

港外の暴風雨

この時港外の暴風は更らに勢を加へて萬丈の怒濤は岸を打つて來た。

ブリユイは、この景色を眺めて、自若として答へた。

『小官は命を奉ずるを欲しませぬ』

ナポレオンは茲にいたつて

『汝、無禮者め!!』

と叫びながら鞭を手にして憤然と、ブリユイの前に進んだ。

ブリユイは、身動きもせず泰然として立つてゐる。

周圍に並みゐる人々は、どうなることかと手に汗を握つて皇帝と大將の顏を見

較べてゐるばかりであつた。

ナポレオンは、やがて鞭を地上に抛げ棄てゝブリユイを凝視した。そして

『卿は、卿の艦隊を二十四時間内にマゴン少將に引繼ぐべし、卿は、去つて和蘭に赴け。』

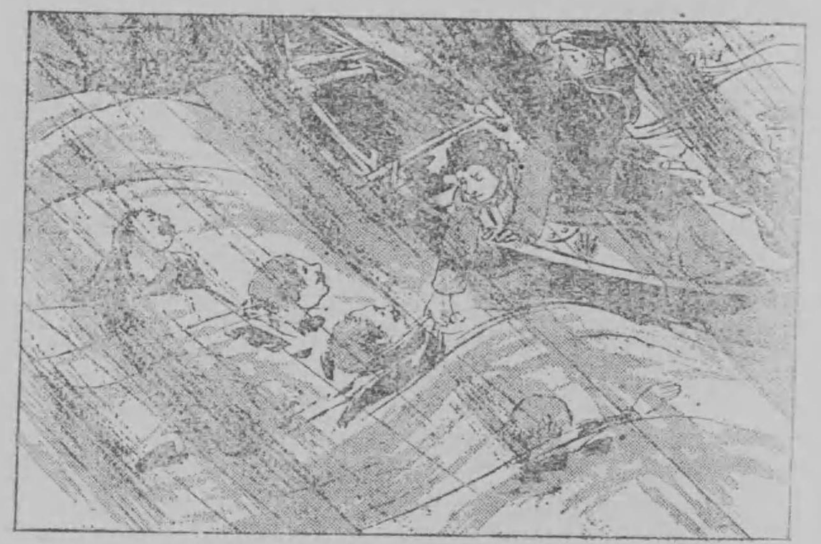
と。今度はマゴン少將に向つて、同じく命令を傳へた。

此時には暴風は、ますゝ猛り狂つて、山のやうな怒濤は船艦を木の葉の樣に弄んだ。

ナポレオンは、頭を垂れ、兩腕を胸の上に組んで靜かに海岸に進んでいつたが、海の上を眺めてゐる其の顏には段々憂愁の色が漂つて來た。

俄然！　恐しい叫喚の聲が起つた。港内にあつた砲艦が、嵐に吹きまくられて岸に打ち返されたのであつた。そして砲艦は破壞し、乘込んでゐた兵士は山なす破浪と戰ひながら救ひを求める叫び聲が起つたのである。

海岸に立つて此光景を見てゐたナポレオンは、



『朕は彼等を助けなければならぬ』

といひながら、突然身を躍らして一隻のボートに飛び乘つた。

周圍の人々は驚いて留めようとしたがナポレオンは夫れを振り切つて自らボートを漕ぎ出した。

忽ち彼の帽子は打ち攫はれ、全身は海水に濡れた。見る〳〵浪がボートの中に浸入して來る。いくらナポレオンが、オールを取つて焦つてもボートは進むどころか今にも覆へらうとしてゐる。

海岸に寄り集つた人々も、ナポレオ

ンの勇氣と大膽に激勵せられて、必死の勇を振つて、溺れようとしてゐる兵士等を救助した。

ナポレオンの嚴格と慈愛

ナポレオンが如何に重きを絶對的服從に置いたか。又如何に部下を愛することの深かつたかは、以上のことでも分ると思ふ。

ナポレオンは後に至つて、ブリュイの剛直を賞し、再び重職に就かせたといふことである。

破獄の英國水兵

ナポレオンがブローニウ滯在中、も一つ彼の性格を物語る逸話がある。

恰度このとき、ヴエルダンの獄に捕はれてゐた二人の英國水兵が、監守を破つてブローニウまで遁れて來た。懷中には元より一錢の蓄へもなかつた。嚴しい探索を遁れて暫く匿れてゐたが、何とかして本國へ歸りたいといふ一心から、二人は人目を忍んで、そこゝから木材の斷片などを拾つて來ては、工夫をこらして一艘の小船らしいものを造つた。

そこで或夜ひそかに此小舟に乘り、闇にまぎれて漕ぎ出さうと企てた。不幸にも彼等は稅關の役人に見付かつて捕はれた。

この勇敢な英國水兵のことが、いつしかナポレオンの耳に入つた。早速二人の英國水兵は、彼の面前に呼出された。

『汝等は、自分で造つた小船に乘つて海峽を横斷しやうと企てたさうだが、夫れは事實か。』

と、ナポレオンは訊ねた。

『陛下がお訪ねの通り、夫れに違ひ御座りませぬ。』

『かゝる危險を冒してまでも本國に歸りたいのは、何か理由があるだらう。遠慮なく語るがいゝ。』

ナポレオンの此一言に二人の水兵は覺えず落涙して、物語つたところによれば、二人共本國には年老いた母が待つてゐること。自分等がゐなければ他に養つて呉れる者がないこと。これが氣になつて、こんな大膽なことを企てたことなどであつた。そして語を繼いでいふには、

『陛下よ、私共は茲で處刑を受ることは元より覺悟してをります。たゞ老母に汝の子は最期の時まで汝の身を案じてゐたと御傳へ下さい。これが私共の唯一つの御願ひでございます。』

と惡怯れずに答へた。

ナポレオンは暫し感激して暗涙に咽んだが、やがて、

『朕は汝等の勇氣と孝心とにめでて、汝等の罪を許すべし。速かに歸國して汝等が母を見舞へ。汝等本國に歸らば、朕は假令んば敵人なりとも、深く勇者を尊敬すると告げよ。』

といひて、多くの旅費を與へ、英國船で二人の水兵を歸國させたといふことである。バローニュの檢閲も無事に終り、ナポレオンは途中ベルギーからラインに道をとり、マインツに立寄つて、十月サン・クルーの宮殿に歸還つた。

ナポレオン敵兵を赦す

一九、戴冠式

千八百四年十二月二日

ローマ法王の枉駕

一千八百四年十二月二日、その日遲しとフランス國民が待ちに待つた皇帝ナポレオンの戴冠式が、愈々ノートル・ダム大寺院に行はれることになつた。

戴冠式の準備は、すでに數ヶ月前から用意せられてあつた。出來るだけ立派に、出來るだけ嚴肅に、といふのがナポレオンの注文であつた。

ローマ法王パイアス七世も迎へられて、パリのチユイレリー宮殿に滯在してをつた。これは本當ならナポレオンの方から、ローマへ上つて法王の膝下に伏して、そして冠を戴くのであるが、彼は特に威嚴を添ふるために法王を態々自分の方へ招いたのである。法王から云へば神聖を侮られたわけであるが、法王は曩にフランスの國敎回復などについて、いろ〳〵ナポレオンの世話になつたことがあるので、その義理上わざ〳〵巴里まで駕を枉げたのであつた。

巴里の町々には五彩眩きばかりに飾られた。嘗ては革命の血に汚された市街も今はウソのやうである。ノートル・ダムの寺院は悉く塗り更へられ、行廊や内部は日も醒むるばかり華麗に裝飾せられた。

沿道には數萬の軍隊が軍服美々しく堵列してゐる。行列を拜觀せむと朝暗いうちから押寄せた市民は、潮のやうに黑山をなして集まつている。

やがて皇帝の行列は宮殿を發した。

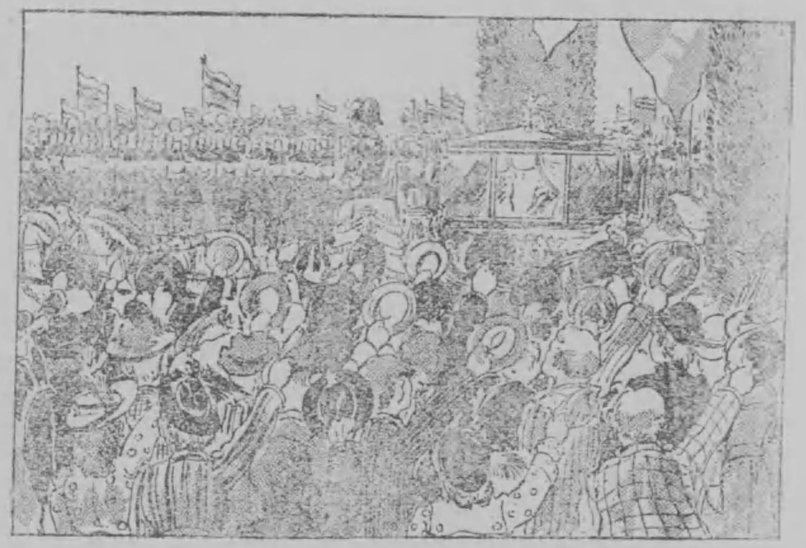
壯厳なる行列

行列の前驅は金繩銀繡の大禮服を着飾つた宮内官である。續いて榮號記章を胸に輝した十數名の元帥が、馬上ゆたかに意氣揚々と進んで來る。大禮服の高官數十名これに續いて靜々と從つて來る。

群集五十餘萬人

その次には黃金を鏤めた馬車が淡黃色の八馬に輓れて轢轆と現はれて來た。車の内には帝王の燦たる正裝をなしたナポレオン及び皇后のジョセフインが嚴然と構へてゐる。

行列は雲の樣に群がつた兵隊市民の間を練つて徐々とノートル・ダムに進んだ。この日ノートル・ダムの附近に集まつた群衆は五十餘萬人以上であつたが、朝から雲があつて今にも降つて來そうな空合であつた。人々は皆今日の盛儀に何とかして空が晴れ〳〵ばい〳〵と氣遣かつてゐた。その中に行列はノートル・ダムに



徐々と近づいた。すると俄かに一天霽れ上つて雲はどこともなく散じ、朗かな日光は、ナポレオンの乘つた黃金の馬車に反映した。その燦爛たる金光!!

群集はみな吉兆だといつて悅んだ。

黃金の馬車がノートル・ダムの入口に進んだ時には、いづくからともなく潮のやうに起つた皇帝萬歲の聲は天地も振ふばかりに響き渡つた。

ナポレオンは皇后ジョセフインを隨へて、式場に進んだ。廊下には大臣を始め、僧正、内外の王侯、新舊の貴族縉紳、淑女が、何れも今日を晴れと紅

紫金銀の禮服を着けて恭しく迎へる。

神々しく白衣をつけた法王は祭壇の傍らに控へて待受けてゐる。

やがて戴冠の儀式は順序通りに行はれた。

法王は中央の一段高い席に上つて皇帝と皇后とに嚴肅な祈禱を行ふ。それから宣誓がある。法王は膏を注いで灌頂を終つた後、徐に帝冠を捧げて、先づナポレオンに戴かせようとした。

すると何と思つたか、ナポレオンは自ら之を執つて自分で之を頭に被つた。それから靜かに之を脱いで、自分の脚下に跪いてゐる皇后に授けた。

法王始め並ゐる人々は、ナポレオンの此の慣例を無視したやり方に、驚きの目を見張つた。

ナポレオンとて慣例上、法王の手に帝冠を戴くべきことを知らぬ筈はない。

しかし彼の考は斯うであつた。

自分は自からの力で帝王の冠を戴くのである。法王を待つて初めて皇帝の位に即くナポレオンではない。だから自らの手で帝冠を戴くのに、不思議はあるまい。又ジョセフインは、自分が皇后にするのである。だから自分が冠を被せてやるのに不思議があるまいと。

自分の力で王冠を戴くのだ

これがナポレオンの見識であつた。

法王は唯宗教上の儀式を行ふ爲に形式的に必要なのであつた。

次には法王が立つて聖書を捧げた。ナポレオンは恭しく之を受け莊重の態度で、

『朕は專心佛國人民の福利と名譽とを增進せんことを誓ふ。』

との意味を宣誓した。

續いて唱歌奏樂があり、一同は佛國皇帝萬歳を三唱して莊嚴な戴冠式は全く終りを告げた。

式果て、ナポレオンは兄のジョセフを顧み、

『ジョセフよ。父上在まして今日の我等を見給はゞ、何と仰せらるであらう。』

亡き父を憶ふ

と歎いた。ナポレオンは今更のやうに自分を信じ、可愛がつて下さつた亡き父を思出て、無量の感慨に堪へなかつたのである。

母のレチチヤは、ルアシンと共にローマに在つて、此の大禮に列ならなかつた。ナポレオンは、せめて母をして、此の盛儀に臨ましめなかつたことを、此上なく残念に思つた。そして後に、此の戴冠式の圖を描かしめたときには、夫れへ母の姿を描き添へさせた。この繪は今でもヴェルサイユ宮に飾られてをる。

母は、此大禮に臨まなかつたけれども、乳母はコルシカ島から遙々呼び迎へられて、之に列なつた。式場でナポレオンは老婆を抱いて接吻した。乳母の歡喜光榮は、どんなであつたらう。

鷲章の軍旗

戴冠式の翌日には、巴里の郊外で大觀兵式が、行はれた。これはナポレオンが皇帝の榮冠を得たについて、鷲章の軍旗を各聯隊に授與するためであつた。彼は一つの小高い丘に玉座を設けしめ、之に登つて詔勅を下した。

『朕が愛する將士よ。汝等の軍旗を見よ。此鷲は常に汝等が集合の標的たるべし、此軍旗は汝等の皇帝が其の國家と臣民とを保護するに必要なりと考へ得るところに常にあるべし。

汝等は之を擁護せんがために其生命を犧牲とし、且つ汝等の勇氣に依りて常に之を勝利の途上に安んぜしめむことを誓へよ。』

と。全軍の將士はナポレオンの詔勅を聽いて、熱誠を以て之を嚴守し、死を賭して此軍旗を護らんと宣誓した。

二〇、伊太利王を兼ぬ

ナポレオンが。未だ青雲の志止みがたき年少時代に、望んで遙かなりしフランス皇帝の王冠も、今は、すでに己れの頭上に在る。是れより榮華は思いのまゝである。

チユイレリー宮殿の奥深く、金銀珠玉もて飾られた玉座に身を横たへたナポレオンは、微笑しながら侍從を相手に歡談してゐる。

その微笑ははちよと見ると、

『我がこと既に成る。』

といふやうにも見える。然し、彼は果して自分の成功に滿足し切つて了つたのであらうか？

否々談笑の裡にも、時々曇る彼の額を見よ。相手に答ふべき返事も與へずに默然と考へ込む彼の眼光を見よ。

ナポレオンは假令んば王冠を得たとても、安閑として玉座に坐つてゐられる人ではなかつた。又時勢はナポレオンをして、晏如としてフランス皇帝の椅子一つに凭れかゝつてゐるのを許さなかつた。

彼が侍從と談笑し乍らも、時々曇る彼の額、默然と考へ込む時の彼の眼光。これらは正に下のことを談つてゐたのである。

自分は今フランスに君臨してゐる。しかし、朕の大望は、未だその一部分を遂げたるに過ぎぬ。命令一下、幸にして我が將士は手足の如く働いて呉れる。

ナポレオン佛國の玉座にのみに甘んぜず

よし、さらば今こそ歐洲全體を舞臺にして大活躍を試みよう。

と。

恰も好し。この時伊太利共和國は特使メルジーなるものを巴里に派遣して來た

その用向きは、

『我が佛國皇帝陛下よ。仰ぎ願はくば、我がミラノ市に行幸あらせられて、何卒我が伊太利の王位に卽かれむことを。』

といふのであつた。

ナポレオンとても先ず第一に伊太利の處分を如何しようかと考へてゐた矢先であるから、早速特使の請ひを容れたのである。

戴冠式あつての翌年、巴里の春も漸く景色立つて來た彌生の末、ナポレオンは春霞に響くノートル・ダム寺院の鐘聲を後に聽き乍ら、伊太利に出發した。皇后も同列であつた。

ナポレオンは途中少し廻り道ではあつたがボリヨンヌの母校に立寄り舊校舍に

イタリー、ナポレオンの君臨を希ふ

ナポレオンイタリーに行幸

少年時代の昔を偲んだ話が傳へられてゐる。

來て見れば粗末な校門も少し朽ちかゝつてゐたが、昔のまゝであつた。雪合戰をした校庭も昔にかはらない。彼は、漫ろに懷かしかつた昔の思ひ出に耽り、しばしば茫然として昔覺えた廢壁老樹に涙を濺いだ。

偶と彼は、學校の門前に住んでゐたマルゲリットといふ婆さんのことを想ひ出した。この婆さんは學校の生徒を相手に、牛乳や果物、菓子などを賣つてゐて、ナポレオンも、よく世話になつたのを想ひ出したのである。彼は校庭から歩を進めて門前に來て見ると、店も昔のまゝで、皺こそ寄つたれ、婆さんも達者であつた。

ナポレオンは婆さんの側へ來て、丁寧に、

『婆さん、古いはなしだが、先年この學校にボナパルトといふ生徒がゐたのを知つてゐるか。』

と訊ねた。

婆さんは恐る〳〵ナポレオンを見上げながら、

『え、確か二十年も前のことですが、よく存じてをります。』

と答へた。ナポレオンは微笑しながら

『そのボナパルトは、どんな生徒だつたい。よく婆さんのとこで世話になつたらうが、勘定なぞ殘してゐるのはなかつたか。』

と重ねて訊ねた。すると婆さんは昔を想ひ出すやうな目付をして、

『いゝえ、決してそんな方では御座いませんでした。それは〳〵親切な方で生徒さんの中で惡い方がゐて、私をだまさうとすると、ボナパルトさんが私の味方になつて下さつて、きつと惡い生徒さん方に拂ひをさせるやうにして下さいました。』

ナポレオンは默つて聽いてゐたが、

『左樣か〳〵。だがそのボナパルトも、少つとは勘定が殘つてゐたかも知れんて。これは、その不足のためだ。』

といつて金貨の一杯入つた金囊を婆さんに取らせた。

婆さんは、この立派な方が陛下で、しかもそれが昔のボナパルトさんだといふことを後にしつて吃驚し、そして昔を忘れない情誼の厚い思召に思はず嬉し涙に暮れたといふことである。

さて、ナポレオンはみち〳〵民情を視察し、順路伊太利へと向つた。

やがてのことに例のアルプスの險にさしかゝつた。

高山の春は、まだ〳〵淺く、白皚々の雪は一面あたりに降り積つてゐる。しかしナポレオンにして見れば、今のアルプス越はなんでもない。あの時の困苦に比べれば、物の數にも足りぬと心に繰返し乍ら、何時の間にかアルプスも下り坂になつてゐた。

と見下せばアルプス連山一つを距てゝ豁然と開けた伊太利の野は、一面に霞がかつてゐる。こゝ南國の春は既に闌であつた。

俄かに溫室へでも入つたような暖かさを身に覺へながら、ナポレオンの一行は麓を下つて廣い野に出た。

古戰場マレンゴーの追懷

この野こそ何の日にかは忘るゝことが出來よう。ナポレオンが夢寐にも記憶から去つたことのないマレンゴーの古戰場が今、彼の眼前に展開してゐるのである。

彼は思はずも馬を駐めた。

見際てもつかぬ地平線からは陽炎が燃え立つてゐる。若草の野には名も知らぬ色さま〳〵な花が、撩亂と亂れ咲いてゐる。どこともなく、幽しい花の香が匂ふて來る。

マルスの神（戰馬の軍神）

あゝ、あの時自分は目に餘れるオーストラリアの大軍を敵手にして苦戰した、このマレンゴー。不思議にも生き永らへてゐる我が生命。もし、あの時、分秒の差で我が軍が勢を盛り返さなかつたら、結果は如何あつたらう。あゝ危かつた。あの時マルスの神が、まだ自分を見棄てゝ下さらなかつたのか……

思はずも、うつとりとしてナポレオンは、マレンゴーの苦戰を追懷した。

彼は此處で閲兵式を行ひ演習をも催した。これは一つは、あの苦戰に敢なくも野末の露と消えた幾多の我が將卒が靈魂を弔ふため、二つには部下の士氣を鼓舞

するためであつた。そして此の時に彼れは、當時の激戦に着した軍服や帽子を記念に着けたといふことである。

やがて一行は歩武堂々勇ましくミラノの都に入つた。

こゝの大寺院でナポレオンの戴冠式は擧げられた。ナポレオンは、ロンバルヂヤ國王傳來の鐵冠をミラノの大僧正から受けた。

ナポレオン鐵冠を戴く

彼は例により、自ら之を戴いて、

『神は朕に此の鐵冠を賜ひぬ。これに觸るゝ者は常に祝福せらるべし。』

と宣言した。このナポレオンの詞が、先例になつて、其後も伊太利の王冠を戴く者は、みな此詞を稱へることになつてゐる。

イタリーの施設

ナポレオンが伊太利から巴里に歸還つたのは、其年の六月下旬であつたが、この短い間に、彼は伊太利國内を巡幸して、道路や運河を新たに開通し、或は公館を建てゝ、このたびの即位行幸を記念するなど、いろ〳〵人民のためを計つた。そこで伊太利の人民は益々ナポレオンの威德に服したのである。

彼はまた、この時にゼノアを屬國とし、ルッカといふ小共和國をも併合して、之れに妹のエリザを封じた。

二、英國侵入策

列國ナポレオンを怖る

ナポレオンがフランスの帝位に上ぼつてからは一段と威嚴も加はつた。内政も益々整つて來た。今はすでに伊太利の王位をも兼るという風で、その勢威は、まさに比べるものがない有樣であつた。

默つてナポレオンの仕打を見てゐたなら、將に天下を併呑して了ふかも知れない。實に危險至極だと恐れ出したのは當時の歐洲列國である。

それらの列國の蔭に、黑幕となつて自在に諸國を操つてゐたのは、イギリスである。イギリスには有名なるピットが宰相の椅子に倚つてゐた。彼は、あらゆる策略をめぐらし魂膽を碎いて、フランスの勢を挫がうとした。それで、先づフランスに近接してゐるオーストリア、ロシア及びプロシヤに策を授けて、對佛同

盟を結ばせた。

これに對するナポレオンの考へは如何であるかといふに、素より彼のことであるから、歐洲を自分一人で統一して見たいといふ野心は心中に充ち滿ちている。それには干戈で輸贏を決するのが彼には最も得意とするところである。何れの國にだつて負をとらない丈けの自信はある。

けれどもナポレオンは此の際熟慮した結果今の場合、民心を休養せしむるために成る可く血を流さぬ外交を利用しようと思つた。

ナポレオンは、こんな計畫から早速英國皇帝ジョーヂ三世に親書を贈つて平和を求めた。

ナポレオン戰を避く

英國に平和を求む

すると英國の外相は直ぐに返書をよこした。それによれば、

『英國政府は露國政府との關係上、露國政府の承諾なくして貴國政府とは何等の御相談をもすることが出來ぬ。』

といふ簡單なものであつた。

イギリス平和を拒む

ナポレオンはイギリスからの返書を見ると、遽に直ぐ英國の眞意を觀破した。そこで全力を集中して少しの隙をも與へず、第一にイギリスを擊ち、これを屈服させることが出來れば、他の列國は戰はずして兜を脱がせることは容易であつた。

その時大陸では第一にオーストリアがフランスと同盟したバヴァリアを擊たうと覗つてゐる。次にロシアは、なんとか口實を設けて南下しようとしてゐる。ブロシヤは如何かといふに、この國には親佛派が勢力を占めてゐるから、止むなく中立の態度を執つてゐた。

これらの國々に對して、フランス軍の配備は、もとより手ぬかりがなかつたが、一方これらの列國を抑へておきながら、當面の急務たるイギリス侵入の準備はナポレオンの俊速な手腕で着々と進捗していつた。

イギリス侵入には誰でも考へるように、第一海軍の後援がなければならぬ。イギリスの優れた海軍力を抑へなければならぬ。而も當時イギリス海軍には有名な

ナポレオンの對英國策

ナポレオンの動員命令

名將ネルソンが控へてゐる。

ナポレオンが恰度イギリス侵入策を企てゝゐる矢先、オーストリアはロシア南下軍の應援を得て、フランスに攻め入らうとしてゐた。ナポレオンは、これに對して、伊太利・オランダ・ハノヴァーに駐まつてゐる佛軍に動員を命じ、自らも一軍を率ゐてプロシアに進發してゐた。

ナポレオンは實に自分獨りで彼方此方に目を配り、自分獨りで策戰を廻らさなければならなかつた。殆んど彼獨りで歐洲全體を相手にしてゐるやうなものであつた。

ナポレオン獨力にて全歐を相手にとる

ナポレオンでなかつたなら、誰れか、この重責を獨りで背負ひ切る者があらう、彼の絶倫な精力、局面が面倒になればなるほど湧いて出るやうな彼の智謀、事情が切迫すればするほど、落付いてくる彼の沈勇を以てして、實にナポレオンなればこそ、フランスの此興敗をその双肩に擔ひ得たのである。

プロシア陣中のナポレオン

いましもプロシアの陣中に、地圖をテーブルの上に擴げ乍ら考へこんでゐるのはナポレオンである。彼は先程まで將軍達にオーストリア軍攻擊の方略を授けてゐた。それはオーストリア軍の大將マックを、ウルムの城砦に圍むことについてであつた。

ナポレオンの苦慮

それが濟むと、彼は直ぐ獨りで密室に入り、かうして地圖を繰り展げて考へてゐるのである。夫れは無論イギリス侵入の方略であつた。いま自分の計りごとに異算があれば、到底イギリスを我が脚下にとり挫ぐ機會は永求になくなる。いなこの場合まかり間違へば、我が存在が危くなると考へたナポレオンは、實に彼の腦漿を千々碎いた。これほど策戰に苦心したことは、今までになかつたほどである。

やがてナポレオンは、すつくと立ち上つた。そして獨語していふには

『見よ。われ、六時間海峽の主たるを得ば、予は乃ち全世界の覇者たるべし。』

と。

彼の胸裡には今やイギリス侵入の策が確然と出來上つたのである。

密計をヴイルヌーヴに將に授く

ナポレオンの命令は直ちに海軍大將ヴイルヌーヴに向つて發せられ、その密計の策が授けられた。

ヴイルヌーヴは直ぐに豫定の行動をとり、フランス艦隊を率ゐて先づツーロンを發し、イスパニアの艦隊とカヂス港に聯合した。

聯合艦隊は巧みにイギリス艦隊の誘致策をとつたので、時の英國海軍司令長官ネルソンも、まんまとナポレオンの術中に陷り、驚き惶てゝ艦隊を率ゐ西印度方面に急航した。

ネルソン艦隊が急遽西印度に着いて見れば、フランスの聯合艦隊は影も形も見えない。

その筈である。ヴイルヌーヴは、ネルソンが西印度に着いた頃、すでに路を他にとり、全速力で歐洲方面に引き返したのである。

喫驚したのはイギリスの軍令部である。何が何やら、狐に憑まゝれたようであるが、兎に角フランス艦隊を抑へなければ本國が危いことになる。そこでいろいろと工夫した結果、偵察船などまで驅り集めて、やつと十五隻の艦隊が出來上つた。

一方ヴイルヌーヴは暫時イスパニアの西北端にあるコルニア港に入つて艦の修理などをしてゐた。

ヴイルヌーヴ優柔

オーストリア征討の陣中にあるナポレオンは之を聞いて、

『兵は由來神速を尚ぶ。何を躊躇するのだ。すぐさま豫定の行動をとれ。』

とヴイルヌーヴに命じた。

しかるに、このヴイルヌーヴといふ將軍は、非常に優柔不斷の人で、加之に小膽な人物であつたから、何事も決行することが出來なかつた。

こんな人物であるからナポレオンの命令があつても中々動かない。しかしナポレオンの嚴命が矢の樣に烈しかつたので、漸々コルニア港を拔錨した。けれども、愚圖々々に海上を遊弋して、容易に豫定の行動をとらず、上句の果ては後から追掛けてくる筈のネルソン艦隊が恐ろしさに、臆病風に誘はれて又々カヂス港に碇

船して了うた。

ヴイルヌーヴがコルニアを出たと聞いて、我が宿望成就の秋至れりと喜んだナポレオンが、之を知つた時の感じは如何であつたらう。

『あゝ我が多年の計畫も、腦漿を絞つた策戰も今は水の泡となつた。』

と、ナポレオンも長大息する外なかつた。陸上にあつて、今、同盟軍を敵手にし兵を用ふること神のやうなナポレオンも、海上までは指麾が屆かなかつたのである。

ナポレオンの妙策水の泡

しかし困厄に際して策略が湧くやうに出てくるナポレオンは、忽ち計略を變じた、巧みに機變に應じ得る彼は、或る妙案が忽然と浮んだのである。

更らに妙策湧く

ナポレオンは直ちにヴイルヌーヴに命令を下して、速かに地中海にゐるイギリスの運送船を襲撃すべしといひ送つた。

在苛カヂスに徒らな日を送つてゐたヴイルヌーヴも、この度は致方なくカヂスを出帆した。

ナポレオンの妙策に誑かされて空しく西印度から歸途を急いだネルソンは、直ちに、ヴイルヌーヴ艦隊の後を追ひ掛けたのである。

ネルソンの艦隊は、イスパニアの南端トラフアルガー岬の沖で、到頭聯合艦隊に追付いた。

時は一千八百五年十月二十一日、こゝに愈々驚天動地の大海戰が始まることになつたのである。

三、トラフアルガーの大海戰

大西洋と地中海との水を縊め括つたやうな、ジブラルター海峽の西北、カヂス港から東南に向つて程遠からぬトラフアルガーの岬を右手に見、艦艦舳艦相銜んで舵を南へ〳〵ととつて急ぐのはフランス・イスパニアの聯合艦隊である。

西印度から最大速力で引返したネルソンの艦隊は道々、聯合艦隊の行衛を彼方此方と搜索しながら、こゝまで來た。

あくれば十月二十一日の味爽、イギリス艦隊の旗艦ヴキクトリアの甲板に立つて、瞬もせず望遠鏡を手にしながら、遙か雲烟漂渺の海上を眺めてゐたネルソンは、やがてのこと、空と水との涯に一抹の雲のやうなものを見付けた。

やがて一抹の雲のやうのものは、確かに我が目指す敵艦隊だといふことが明瞭になつた。

ネルソン将軍は海上に在ること實に三十五年、この間に海戰をなすこと百五回、それがために今は右手と左眼とを失つてしまつた獨眼隻手の將軍であるが、その深遠な智謀、實戰上の技倆は、誰も及ぶものはなかつた。

ネルソンの決心

夫れほどのネルソンであつたけれども今度のフランス海軍征討には非常な決心を以て出陣したのである。素より彼は海の上では誰にも負けね自信を有つてゐたけれども、此度の決戰こそはイギリス國家興亡の岐路である。英國海軍を双肩に背負つて立つた以上、自分の策戰が誤れば、英國海軍は滅亡である。英國海軍の滅亡は、やがて英國夫れ自身の滅亡である。殊にフランスには、軍艸のやうなナポレオンがゐる。

ネルソンが、いよ〳〵出陣すると定まつたとき、彼は秘書官を呼んでいふには

『自分はこれからフランス海軍征討の首途に向ふ。これについて汝に頼みがある、夫れは外でもない。軍艦を建造へたとき、檣材に使つた材の殘りがあるだらう。どうか、それで棺を作へておいてくれ。』

と。秘書官は訝しんで、その理由を問うた。ネルソンは、

『訝しむのも尤である。けれども、予が凱旋の曉には必ずそれが必要になるだらう。』

と答へた。

ネルソンは實に生きて再び還らぬ大決心を以て出陣したのである。

それであるから、ネルソンは出陣の當初から、ナポレオンの計策に欺られたのであるから、彼の心中はどんなであつたであらう。

一時も速かに敵艦を見付けて、これを絶滅しなければ、我が祖國に申譯がない

との決心で、日夜敵艦發見に心膽を碎いた彼は、漸つとトラファルガーの近くで、その心願が屆いたのである。

その時に於けるネルソンの欣びと決心とは、どんなであつたか、想像するに難くはない。

彼は直ちに命令を下した。

やがて、

『敵艦見ゆ。』

といふ信號が旗艦のマストに高く掲げられた。

兩艦隊の距離は一刻一刻に接近してくる。やがて敵の艦隊が明瞭に肉眼でも見えるまでになつた。

さて兩艦隊の勢力は、どうであるかといふに、イギリスの方は總數三十隻、聯合艦隊はフランスの軍艦と、イスパニヤの軍艦とを合せて總數四十隻より成つてゐた。

『敵艦見ゆ』

兩艦隊の陣立

この場合に臨んでは、聯合艦隊の司令官ヴイルヌーヴが如何に優柔不斷でも、臆病でも、最早や戰を避ける譯にはゆかなかつたから、止むなく戰鬪旗を旗艦に掲げて應戰するの決心をした。

先づヴイルヌーヴ提督は旗艦ビユセントールの檣頭高く、

『右舷開き戰列作れ。』

の信號を掲げさせた。

イスパニアの司令官グラヴイナは十三隻の艦隊を率ゐて、縱隊の先頭を承はる、それに續いてフランスの艦隊が單縱陣を作つた。提督ヴイルヌーヴは先頭から十二番目の旗艦ビユセントールに坐乘してゐた。

これらの單縱陣は全長殆ど五浬に及び、首尾行動の聯絡を缺き、頗る拙い陣立であつたのである。

イギリス側の陣立はいかにと見るに、全艦隊を二隊に分ち、一は大將コリングウッドが十三隻を率いて、ローヤル艦に乘つてゐる。他の一隊は司令長官ネルソ

ン自ら十四隻を率ゐて、凡一浬の間隔を保ちながら二縦陣を作つて進んで來た。

兩艦隊は、いよ〳〵指呼の間に迫つた。

この日、秋の空は高く晴れ渡つて、海上は油を流したやうな穏かさ。折々微風が吹いて來る毎に、兩艦隊の戰闘旗が翩翻と翻る。風を孕んだ帆に旭が映じて燿煌と光る。

いまや兩軍の緊張は白熱度に達した。命令一下すぐにも火蓋を切らんと砲手は身構へてゐる。嵐の前の靜寂さが暫時つゞく。

千古不朽の信號

と見ればイギリスの旗艦ブイクトリアの檣頭高く一の信號が掲げられた。

『英國は各人に、其義務を盡すべきことを期待す。』

國家が興るも滅ぶるも、すべて此の一戰で決するといふ際どい場合に、ネルソンの衷心から流れ出た此の短い文句には、千鈞にも勝る重い力が含まれてゐた。

間もなく英國の全艦隊からは萬雷ののやうな歡呼の聲が起つた。各人みな、この信號を見て、いまさら電氣に打たれたような感動を覺え、その瞬間みな死を決

英艦隊みな決死

したのである。

古今未曾有の大海戰は開始された。

先んずる者は他を制すの譬へ、英艦隊は先づ攻勢をとつた。

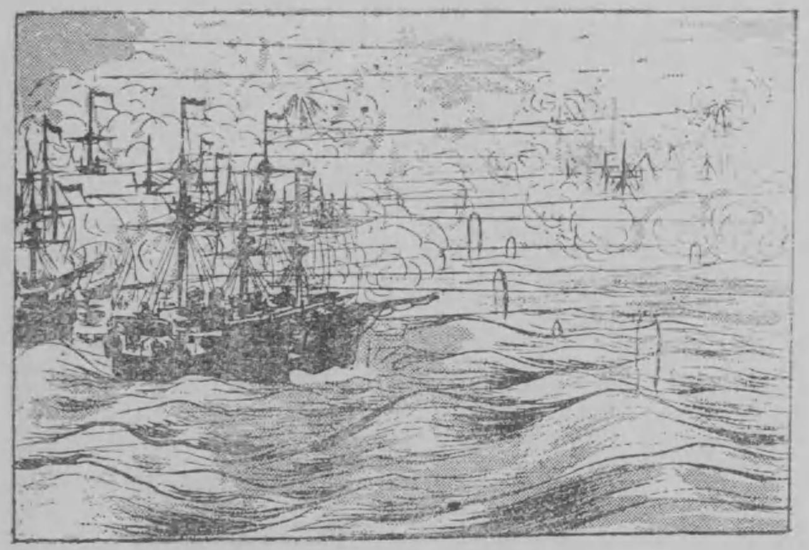
中でもコリングウッド將軍の坐乘してゐるローヤルソヴエレーン號は速力が抜群に速かつたので、只獨り艦列を離れて波を蹴立てながら敵艦目掛けて驀地に挺進した。

之を見た敵艦は周章てゝ砲門を開いた。けれどもローヤルソヴエレーンは敵の砲火を浴びながら一彈も放たず悠然と進んでいつた。

漸く敵の艦尾に接近した時、時分は好しと一齊に砲門は開かれた。そして大砲を雨霰のやうに亂射しながら敵艦隊の中に突進した。

このローヤルソヴエレーンの大膽な武者振りに勵まされたイギリス艦隊は、何んで遲れをとらう。ローヤルソヴエレーンの跡を追ふて我れ先きにと敵艦目掛けて突き入つた。

ローヤル、ソヴエレーの號の勇敢



忽ちにして驚天動地の修羅場が演じ出された。

いままで一天拭ふやうに晴れ渡つた大空も、うち出す彈丸の硝煙に、四邊も見え分かぬ樣に晦冥くなつた。鏡のやうに平かだつた海の面には怪物のごとき艦艦が縱横に入り亂れる。砲聲が殷々と轟く。甲板に命中した彈丸が耳を劈くやうな音をして爆發する。數多の將士が傷つく。倒れる。鮮血が物凄く甲板の上を朱に染める。

敵、味方の差別も分らぬほど入り亂れて暫らくの間、激しい海戰が續いた。

その中に敵艦の間に猛進したローヤルソヴエレーンは逸早くも豫定通り既に敵の縱隊を兩斷して、大膽にも風下の敵艦十六隻を相手に右に突き、左に當り、さながら獅子の荒れ狂ふやうに奮鬪してゐた。

一方イギリスの旗艦ヴイクトリアも激しい砲火を浴びながら、敵の旗艦ビユセントールを目掛けて突進した。しかるに元より臆病なフランス提督ヴイルヌーヴは敵の攻撃を避けるために、多くの護衛艦をつけて置いたので、近寄ることは中中困難であつた。

止むなくヴイクトリアは、ビユセントールの艦尾に廻り、護衛艦の一つを猛烈に砲擊した。その中に唸りを發して飛んだ一彈が吃水線のところに命中したから何んで堪らう。見る〳〵この護衛艦は、右舷に傾いて、やがて沈沒した。

息をつく暇もなくヴイクトリアは、ビユセントールに向つて驀進した。そして、とつときの重裝彈を矢繼早やに放つた。ビユセントールも死物狂ひに砲擊したが、あたりの護衛艦もヴイクトリアの重裝彈に恐れて、思はず一時に、さつと靡いた。

まさに白兵戰である。しかも陸戰なら、大將と大將との一騎打に異らない。

ヴイクトリアも傷ついた。ビユセントールの方では、ちよつとの間に二十門の大砲は打ち摧かれ、甲板に働いてゐた水兵の大部分は海中に跳ね飛ばされ、すでに危く見えた。

一旦はヴイクトリアの鋭い勢に、思はずも四邊の護衛艦は退いたが、すでに旗艦の生命危ふしと見てとつたか、忽然とヴイクトリアに向つて驀進して來る一艦がある。これはレダウダブルといふ艦であつた。

やがてレダウダブル艦は咫尺の間に迫つて來た。今は互に敵手の人影も見えるまでに進んで來た。

と見ればレダウダブルの甲板には數多のフランス陸兵がゐて小銃の亂射を始めた。見る〳〵ヴイクトリアの甲板に立ち働いてゐた多くの水兵は、この俄かの狙撃に、バタ〳〵算を亂して倒れ始めた。やがて檣の頂も倒された。舵輪も打ち碎かれた。

甲板に立つてゐたネルソンの身邊にも彈丸が雨のやうに落下した。

この日ネルソンは金色燦爛たる大禮服を裝うて、胸間には幾十度の戰勝を物語る勳章が一面に輝いてゐた。

彼は素より此の戰に必勝を期し、又必死をも期してゐた。だから彼の此の正裝も、まさに晴れの死裝束であつたのである。

ネルソンは、猶も飽かず、甲板の上に突立つて盤石のやうに動かなかつた。そして細心な注意を以て全局の戰況を觀視してゐた。彼の此の姿が敵の目標とならずにはをらなかつた。敵の陸兵が狙撃する小銃は、ます〳〵勢强くなつた。

ヴイクトリア艦の甲板に働いてゐる將士は最早、全滅の憂目を見るかと疑はれた。けれども不思議なことに、ネルソンの身には未だ傷一つ受けてゐなかつた。

まさに神明の加護があつたのであらう。

旗艦ヴイクトリアの運命危しと見たイギリスの軍艦は、すぐにその近くへ集まつてきた。フランスの軍艦も旗艦を護らうと驅け參じてきた。

鉉々相磨す

こゝに最後の激しい海戰が起つた。敵味方の艦は殆ど舷と舷とが磨れ〳〵になるまで近寄つて戰つた。卍巴をなして追ひつ追はれつ戰ふありさまは物凄い限りであつた。黑烟が濛々と立上がるために四邊は眞闇になつて了ふ。その裡を凄じい音がして砲彈が飛び交ふ。敵艦に命中した彈丸が轟然たる爆聲を發する。忽ち悲痛な叫喚の聲が起る。火炎を吹き出す。水柱が立つ。悽慘な音がして艦が沈沒する。

ネルソンの戰死

幾何かの時間こんなことが繰り返へされて激しい鬪ひが續いた。

しかし兩軍は、こゝの意氣に於て、すでに比較にならぬものがあつた。

『祖國は自分に、國民としての義務を盡して呉れと期待してゐるんだ。』と感じてゐる、イギリスの將士に刃向ふ敵はなかつたのである。

聯合艦隊は、すでに形勢危ふく見えて來た。

ネルソンが、レダウダブルの檣樓から狙撃されて敢なくも己が豫言通りに見事な戰死を遂げたのは此時である。

佛艦隊の降服

英國艦隊は、ます〳〵優勢になつて敵を攻撃した。

聯合艦隊は到底叶はぬを知つて漸く退却を始めた。或は傷つき、或は沈み殘るところは元より幾何もなかつた。

英國艦隊は、どこまでもと追撃した。

こゝに脆くもフランス旗艦ビユセントールは白旗を掲げて降服の意を表した。

聯合艦隊提督ヴイルヌーヴは英艦隊のために捕虜となつた。

フランス、イスパニアの聯合艦隊總數四十隻の內、敵のため捕獲されたもの十八隻、その他或は沈沒し、或は傷き、全く無事であつたのは僅かに四隻しかなかつた。

こゝにいよ〳〵英國艦隊の全勝は確實になつた。

實にネルソン將軍が身命を神に捧げて、始めて此の結果を獲たのである。

ネルソンは重傷を負うたが、瞑目する際まで、味方が果して確實に勝利を得たか否かを氣遣つて止まなかつた。かくて敵將ヴイルヌーヴを捕虜にしたこと、味

「余は余の義務を果せり」

アングロサクソン（英國人のことをいふ）

制海權イギリスに歸す

＊ナポレオン

方は方に大勝を博し得たことを聽き、自分の重傷を忘れて立ち上つたそして、『神に感謝す。予は予の義務を果せり。』の數語を殘し、さも滿足げに微笑して甲板上の露と消えて了つた。

あゝネルソンの一死はイギリスの海軍をして、是から永く雄を世界に誇らしむる基を開いたのである。

英國の有名な政治家カンニングといふ人が、ネルソン將軍を弔ふた詞がある。

『戰利品で飾つた將軍の墳墓より輝く榮光は、將軍を失つた英國人の非愁の闇を破つて吳れる。又將軍の赫々たる不朽の芳名は、長く將軍の祖國に存する武名を擁護して吳れるだらう。』

と。

今に至るまでアングロサクソンがネルソンを神のやうに敬愛してゐるのも素より理ある哉である。

これから制海權は全くイギリスの獨占に歸して了つた。そして流石のナポレオンも、遂々英國侵入のことを斷念して了はなければならなくなつた。

ドナウ河（ダニエーブ河といふ）

ウイーン（ヴイーンともいふ）

二三、アウステルリツツの決戰

さてオーストリア軍の形勢はどんなであるかといふに、第一にマックといふ將軍が先鋒を承はつた。マック將軍はフランス軍に對して堅固に之を防ぐつもりでウルムといふ城砦にたてこもつた。マックの考では此所ならば要害の地ではあるし、間もなく應援に來て吳れる筈のロシア軍を待つにも一番安全な場所だと思つてゐたのである。そして後は要害の地であるから、フランス軍は必ず前面から攻めて來るだらうと豫期してゐた。

然るに何ぞ圖らん。このマックの豫想は大的外れであつた。

ナポレオンは直ちに兵を進めてドナウ河の左岸を渡り、プロシヤの中央に進入した。これはウレム城砦の後方に出て、オーストリアの首府ウイーンとの連絡を絶つて了へばマックは孤立する。そこで難なく之れを攻め落すことが出來るとい

＊ナポレオン

ふ計略であつた。

そこでナポレオンは直ちに之れを攻圍して、マックに降服を勸告した。

オーストリア軍はナポレオンの神速な計略によつて全く困惑に陷つて了つた、各所に散在してゐるオーストリア軍はナポレオンの作戰に妨げられて、最早一致の行動を取ることが出來なくなつたのである。

そこでマックも士氣の衰へた將士を以てナポレオンに當つたところが勝つ望もないといふので遂に一戰をも交へずに佛軍に降服を請ふたのである。

佛軍一戰をも交へずウルムを陷る

佛軍の獲たところは捕虜三萬餘人、その他、武器彈藥など山のやうであつた。

これ實に一千八百五年十月二十日、トラファルガー大海戰のあつた前日のことである。

この時フランス軍のネイ將軍とマッセナ將軍とは夫々別方面からオーストリア軍を攻めて、何れも到る所敵軍を潰走せしめた。そして逃ぐる敵軍を追擊しながら、兩將軍はクランゲルトといふところに相會し互の戰勝を祝し合つた。

ナポレオンふ海軍を氣遣

ナポレオンは恰度この時ウルムを陷れたばかりであつたが、直ちに命令を下してネイ將軍の率ゐる一隊を右翼とし、ミュラー將軍を左翼として自ら本隊を率ゐてウイーンに向つた。

この時オーストリアとロシヤとの聯合軍がウルムの籠城軍を援ひ出そうといふので猛烈な勢で進んで來たが、すでにマックの降參したこと、佛軍の進擊などを聞いて俄かに士氣が沮喪し、フランス軍を邀へ擊つ勇氣がなくなつた。

そこでオーストリア、ロシアの聯合軍は方面を變へてモラヴィアといふところへ道をとつた。

一方ナポレオンは三軍を率ゐて歩武堂々ウイーンに向つたが、彼の面上には何となく晴々しない憂色があつた。何故であつたらうか。すなはちイギリス征討の海軍方面からは何等の情報もなかつたのである。

最早ウイーンも間近いところまで進んで來た或日のこと、突然後から息せき切つて追驅けて來る傳令があつた。

ナポレオンの絶望

これこそナポレオンが、もしやと掛念してゐたフランス艦隊敗戰の知らせであつた。

しかもトラファルガーの大海戰で我が艦隊の全滅――提督ヴィルヌーヴの捕虜――この報告を聽いたときの彼の驚愕！。

さすが物に動ぜぬナポレオンも、此時ばかりは地團駄ふんで悔しがつた。折角の妙策も水の泡となつた。イギリス侵入も永久に絶望となつた。海上の主權は最早イギリスに奪はれた。あの卑怯のヴィルヌーヴ奴！咄賣國奴！

彼の無念、遺憾、齒がゆさは、どんなであつたらうか。英雄の心事も坐に思ひやられて氣の毒ではないか。

しかし陸上に目前、聯合軍を控へてゐる際、いくら兵を用ひること神の如きナポレオンでも、海上まで自分の意志どほりに指麾が屆かぬのも致方がなかつた。

彼は一時報知を聽いて駭き歎いたけれども、いつまでも悲しんでゐる彼ではなかつた。ナポレオンは直ちに氣をとり直した。そしてたゞ一言、

『朕の體は、たつた一つだ』

四圍皆な敵軍

と苦笑した。

ナポレオンの考では、すぎ去つたことはすぎ去つたことだ。この上の策は一日も速く大陸を平定して間接にイギリスを攻めるほかはない。さうだ。

こう決心したナポレオンは、直ちに自ら陣頭に馬を進めた。

彼は更に全軍に敎戒を與へ、一層奮勵して敵軍を擊破すべしと勵ましたから、全軍はまるで破竹の勢逃ぐる敵を追ひながら十一月にはウイーンに入り、更に進んでドナウ河横ぎつて聯合軍の滯陣してゐるモラヴィアに向つた。

顧れば味方の軍勢八萬に對して前面には兩帝の率ゆる兵九萬、右方にはチャールス大公のオーストリア兵四萬が控へてゐる。背面にはフエルヂナンド大公の軍二萬餘が形勢を覗つてゐる。又左方はどうかといふに味方か敵か、態度の曖昧なプロシヤの精兵十五萬が兩軍のありさまを觀望してゐる。

もし此のまゝで砲火一たび開かれたなら、ナポレオンは四方から挾擊に合はな

ナポレオンの赫怒

ければならない。

ナポレオンも胸中には目算があつたけれども、兎に角形勢が不利なことを見たから、一策を案じて、ロシヤ皇帝の許へ使者を遣り會見を求めた、

ところが聯合軍の方では、味方の優勢を誇り、こんどこそはフランス軍をたゞ一撃と喜んでゐた矢先だから、ナポレオンの申込を膠もなく拒んだ。そして代りの一將を寄こしてナポレオンに言ふには、

『伊太利、白耳義ならびにラインの諸州を渡すなら、特別を以て佛國へ退却することを許してやらう』

と傲言した。

さすがのナポレオンも、この無禮な詞に赫と怒り、すぐに使者を追ひ反して言つた。

『見よ四十八時間の中に、彼等を懲らしめて見れるぞ！』

その時ナポレオンの傍らに一人の老兵がゐたので、彼はつか〳〵歩み寄つて

痛快な一老兵の言

『だうだ、いまの詞をきいたか。敵の奴等は、おれらを一呑に呑むといふぞ。』

と串談交りにいふと、彼の老兵は、

『呑めるなら呑んで見ろ。胃袋に齧りついてやるから。』

と答へた。この痛快な老兵の詞に、ナポレオンも幾らか氣分が晴々しくなつた。

そこで彼は又腦漿を絞つて策戰の計略を廻らした。

彼は暫らく沈思してゐたが、忽ち勝利の鍵を見付けた。

夫れは我が軍が今にも退却しさうな素振りを見せておいて飽くまで敵を安心させ之を係蹄にかけて一息に敵を打ち破る策略であつた。

先づ第一にナポレオンは、先きに敵方の本營であつたブリユンを味方の本營となし諸將軍や參謀を隨へてブリユン及びアウステルリツツの間に廣がつてゐる平野を視察した。その時彼は幕僚に向つて言ふには、

『此平野を仔細に査べて呉れ。我々は近い中に此所で大決戰を始めなければならんから。』

と。アウステルリツツはブリユンから二哩ばかり距たつてゐる一小村である。

敵軍ナポレオンの術計に陥る

數日の間にナポレオンは、すつかり戰鬪の準備を整へさせた。兵の配備も出來上つて、何時でも戰へる用意が成つた。

やがて十二月一日の午後であつた。

ナポレオンが望遠鏡を取つて向ふを見ると、彼の眼鏡に映じた敵はナポレオンが豫め計畫して置いた通りの術策に陷つて、味方の右翼を迂回しようとしてゐる。ナポレオンは微笑した。

『ははあ。敵の奴、いよ〳〵自分の係蹄に落ちて來たな。見ていよ。二十四時間以内にあの敵原は、みな我が物だ。』

ナポレオンは將軍ムラーに命じて、此の敵と戰ふ眞似をさせた。そして到底叶ぬ風をさせて、僞り退却せよと命じたのである。敵は益々圖に乘つて近寄つて來た。誘き寄せられるとは氣付かなかつたのである。

その夜ナポレオンは部下に命を傳へて、更に改つた陣形を整へさせた。そして敵はフランス軍の陣形が如何に變化したか、元より豫想する筈がなかつた。

大英雄の態度

いよ〳〵戰備萬端整つたところで、ナポレオンは全軍に對し、敵軍の拙い策戰は斯々、味方の乘ずる機會はこれ〳〵などと說明して士氣を鼓舞した。それから重立つた將士を自分の營舍に招いて共に晩餐をとつた。

食卓に着いて彼は快活に笑ひ、且つ談じた。いろ〳〵のはなしが出た。文學の話や芝居のはなしをも語つた。昔の戰爭話や功名談も出た。もし知らぬ人が突然此の席に入つたら、翌日生命がけの大決戰が始まるなどとは到底も思へないほど呑氣な有樣であつた。

やがて樂しい雜談の裡に宴が果てる。

ナポレオンは、すでに睡氣を催して、傍の藁の上に身を横たへ鼾をかいてゐた。大決戰を前に控へて、此の綽々たる餘裕は、まさに大英雄ならでは出來ぬ態度である。

それから一時間の後ナポレオンは短い睡眠から目醒めた。

＊ナポレオン

十二月二日
忘れもせぬ
記念日。

直ぐ馬に跨り、單騎靜かに我が戰線の前衛を視察し始めた。彼はなるべく將卒の眼を避けようとしたけれども、之は無駄であつた。フランスの將卒は皇帝自ら單騎の視察を感激するの餘り、各々藁を焚いて熱心に彼を歡迎した。そして誰の口からとも、

『皇帝萬歳！』

の聲が起つて、夫れが潮の湧くやうに全線數里に傳はつた。

今日――十二月二日――は忘れもしない皇帝卽位の記念日である、全軍の將士は皆この日を記憶してゐた。彼等は互に腕を扼し合つて誓つた。

『我々は今や最も勇敢に奮戰しなければならぬ。此の光榮ある記念日を飾るために。』

と。全軍の士氣はいやが上にも奮つた。

ナポレオンも、此の飾り氣のない眞心の籠つた、愛する部下の祝の詞に、いたく感動させられた。そして叫んで言ふには。

＊ナポレオン

『こんな崇厳な氣持になつたことは我が生涯中にまだないことだ。』と。

やがて時刻が移つて十二月二日の夜が靜かに明け放れた。

ナポレオンは幕僚と共に立ち上つて、輕い朝餐をすまし、劒を佩た。

『諸君、いざ出でて勝利の日を戰はうではないか。』

彼は直ちに馬上の人となり、小山に登つて戰線を展望した。恰度その時輝き渡つた太陽が、今しも地平線上に立ち上ぼつて來た。

同じ太陽であるけれども、その日の太陽は平常と違つて何ともいへない一種の莊嚴な趣があつた。これから後、フランス軍は戰爭がある度毎に、朝日の昇るのを見て、戰勝の前兆だといふやうになつた。所謂『アウステルリッツの太陽』といつてフランスでは一つの諺のやうになつたのである。

『アウステルリッツの太陽』

三皇帝の決戰

最後の命令が下つた。

將軍達はおの〳〵その陣地に就いて、こゝに歷史上稀れなる三皇帝の決戰が始まつた。

敵軍ナポレオンの奇計に陷る

ナポンオンは豫定の通り、故意と右翼前線の兵力を微弱にして、こゝに敵を誘き寄せた。これを見てロシアの方でなクツソフ將軍の率ゆる大軍がフランス軍の右翼を突破しようと、潮のやうな勢で一時に殺到して來た。

ところが何ぞ圖らん。右翼の後方にはフランスの精鋭な軍隊が鳴りを鎭めて控へてゐたのである。

この軍勢が一時に現はれて來たのでクツソフ將軍の大軍勢は、その意外に驚き周章てゝ退却を始めたから、その中央部隊に少し隙が出た。ナポレオンは親ら中軍を指揮しながら全軍を監視してゐたが、此の有樣を見て、直ちにスール將軍に命を下して、此の中部の虛隙に突擊させた。周章てゝゐるクツソフ軍勢は此の俄かの襲擊に何で一堪りもあらう。忽ちのうちに軍勢は兩斷せられ、隊伍は丸で潰亂して了つた。

オーストリア、ロシアの兩帝は、アウステルリッツの高所から此の樣子を觀望

ロシア近衛兵の頑強

してゐたが、味方の敗軍を見て、直ちにロシアの近衛兵に命を下し、スールの軍を撃退しようとした。

こゝにロシア近衛兵とスール將軍の軍勢との間に激しい闘ひが始まつた。

雨軍互に砲彈を雨霰のやうに浴びせ掛けて、一歩も退くなとばかりに戰つたがロシア兵の頑強な勢にフランス軍は稍色めき渡つて來た。すでに最早撃退されん有様になつて來た。

敵軍左翼の敗走

この時望遠鏡を手にとつて瞬きもせず戰況を眺めてゐたナポレオンの驚きは一通りでなかつた。

彼は直ちに自分の近衛兵に下知して、此の急を援はせた。

一粒選りの精鋭なフランス近衛兵が面も振らず一齊に露軍に突撃した。この鋭い鉾先にロシア軍も少し亂れかけたが、決死の勇を振つて抵抗した。

けれども、新手なフランス近衛軍の勢には最後まで敵することは出來なかつた。つひに力屈して散り〳〵に敗走し始めた。この時ロシア近衛軍の指揮官コンスタンチン大公の如きも、馬に鞭つて眞先きに遁走したのは見苦しき限りであつた。

さて右翼の方は、こんな風でフランス側の勝利となつたが、他の方面はどうであるかといふに、ナポレオンは自ら中軍を指揮して敵の本隊に迫つてゐた。中にもムラー將軍の率いた騎兵隊は、勇ましくも陣頭に現はれて猛烈に射撃を始めた。

敵軍の總崩れ

敵軍の方では、何しろフランス軍の右翼に大部分の軍勢を送つて遣つたので、必死になつて戰つてはゐたものゝ非常な苦戰であつたのである。

そのうちにフランス軍の方では砲兵隊が後方の高地に陣地を占め、そこに砲列を布いて、一時に敵の右翼を砲撃し始めた。

火蓋を切つて烈しく打ち出した彈丸は唸りを生じて敵軍の頭上に落下する。やがて百雷の一時に落下したかと怪まるゝやうな響音と共に破裂する。この砲撃が暫らくの間つゞいた。

さなきだに敵軍は左翼、本隊ともに潰え始めてゐたのであるから、遂々全線に

渡つて總崩れとなつて了つた。

敵は附近に結氷してゐる湖水の上を渡つて我先きにと爭ひながら退却を始めた。

これを眺めたナポレオンは急に命令を下して、砲兵隊に此の湖上を擊たせた。

忽ち湖上には彈丸が飛んで來た。氷が破れる。氷の上を渡つて遁げる將卒は續々と溺れ始めた。見る〳〵湖水の面は敵軍の帽子で埋まつた。こゝで溺死した者が實に二萬に及んだ。

とにかくアウステルリッツの戰は

オーストリア、ロシアの同盟軍が悉く破れ潰えて了ひ、兩帝は敗走した兵を整へまとめる暇もなく、僅かの殘兵に護られながら身を以て遁れたのである。

海に敗れたナポレオンは、陸に於て大勝し、その埋合せをしたのである。

この戰は三皇帝一所に會して雌雄を決しようといふ戰で、ナポレオンの戰史中でも最も光彩に富んだ決戰である。歷史上で「三帝の會戰」とか「帝王の戰鬪」といはれてゐる。又ナポレオンの戴冠式記念日の戰であるから「祝日戰」などといふ人もある。

さてイギリスは此の戰の結果を何んと聞いたらう。

中にもピット自身は其の局に當つた人だけに失望と落膽とに身の置き場もない程であつた。彼は自分の書齋に掛けてあつた歐洲の地圖を默然として暫し眺めてゐたが、痛恨と悲憤との感慨に堪え得ず、秘書官を呼んで命じた、

『此の地圖を卷いて呉れ。もう今後十年の間は之に用がないから。』

と。

ピットの悶死

ピットは、これから非常に健康を害して病床の裡に悶々の情を抑へてゐなければならなかつた。ネルソンが死を以て贏ち得たトラファルガーの大捷も、彼の失望せる意氣を鼓舞することが出來なかつたのである。

論功行賞

彼は爾來快々として樂まず、間もなく悶死したのである。

フランスは同盟軍を敵手にして大捷を得た。この次には外交上の戰が當然問題になる。これについても又ナポレオンは彼の非凡な手腕を要する時が來たのである。彼は大勝後、あらゆる手段を盡して將士を犒つた。論功行賞をも行つた。各將軍以下夫れ〴〵の功勞に準じて或は貴族に列し、高爵を與へるなど、一兵卒に至るまで洩るゝところなく賞を與へた。特に彼は戰死者の功績を表彰するために、それらの遺子をば自分の義子として、政府の費用で養育し、ナポレオンの名を其名の下に附けることを許す令まで出した。いかにナポレオンが部下を愛撫するの情が深かつたかは、之れでも分明ることゝ思ふ。

ナポレオン戰死者の遺子を養ふ

さてオーストリアの皇帝は豫期に反して、散々な味方の敗戰に、一旦は身を以て逃れたけれども、いまのところ到底ナポレオンを敵として戰ふ力がないといふことを悟つたから、とにかく平和を乞はうと思つて、皇帝自身、身を屈してナポレオンの陣營を訪ねたのである。

ナポレオンオーストリア皇帝と會見す

兩皇帝は粗末な小舍の前で會見した。

プレスブルヒの條約

同じ年の十二月二十六日にはプレスブルヒといふ町でオーストリア、フランス兩國の條約が締結されることになつた。

歐洲の地圖變はる

此の條約によつて歐羅巴の地圖は復た變つた色に染められた。

すなはちオーストリアはヴェニスの領土をイタリアに讓ること。チロル及びフオラルベルヒをバエルンに割讓すること。又同樣の土地をヴイルテムベルヒにも與へることなどであつた。

しかし、ナポレオンはアウステルリッツの戰勝に獲た結果を一層鞏固にするため、歐羅巴地圖の上に、もつと改竄を加へたのである。これは一つにはトラファルガー海戰の失敗を、これで補はうといふ考もあつたからである。

ライン同盟

第一に彼はナポリにをつたブルボン家を逐うた。

次にヴイルテムベルヒ王、バヱルン王などを盟主としてライン同盟といふものを作らせた。これには更らに西獨逸の諸君主などが加はつて十六國も加盟者があつたのである。そして同盟諸國の安全を保つためにナポレオンがその保護者になつた。もし一朝事ある場合には、いつでも此同盟國が六萬の軍を出してナポレオンの麾下に集まることを誓つたのである。これ一千八百六年七月のことである。

フランスの強大

又ナポレオンは此のライン同盟を組織したとき、プロシヤをして之を承認せしめ、同時にライン河の左岸にある土地をフランスに割讓させた。その代りにイギリスからとつたハノーヴアを與へる約束をした。

こゝに於てフランスは歐洲に並びない勢となつた。海軍の全滅は優に補つて餘りある結果となつたのである。この時は恐らくナポレオンの極盛時代といつてもいゝと思ふ。

ナポレオンの兄弟思ひ

しかし兄弟思ひのナポレオンは、自分一人が偉大であることを好まなかつた。

ナポレオン門の光榮

自分の力で築き上げた光榮を一門一家と共に分ちたかつた。陣頭に立てば荒獅子のやうな彼は心の裡に何とも言へぬ優しい人情を有つてゐたのである。

そこで、彼はアウステルリッツの戰で獲た領土をば、兄のジョセフはじめ、弟のルイヤジエローム、妹のエリザ、ポーリヌなどに分けてやつて、皆王位に卽けてやつたのである。たゞ弟のルシアン丈けは除け者であつた。ルシアンは仲々の人物であつたけれども、兄のナポレオンと意見が合はず、イタリアへ行つて、文學、美術を樂しみながら暮してゐた。けれども、やはりナポレオンの餘光で富貴に其の日を送つてゐた。實にナポレオン一門は、ナポレオンを中心にして、皆光榮ある輝きに包まれたのである。

二四、長驅ベルリンを衝く

當時プロシア國の狀態はどんなであつたかといふに、この國は、彼の有名なフレデリック大王が偉大な覇業を建てゝから既に五十年になるけれども、その間歐

＊ナポレオン

洲の一強國として大陸に雄飛してゐた。そして大王の鍛へ上げた精鋭無比の軍隊は、もはや昔の面影はなく、餘程弱くなつてゐたにも拘らず、やはり大王の餘光で今もなほ内外に威望を保つてゐた。國民も、我がプロシアほど強いものはあるまいと信じてゐた。一方にナポレオンといふ大豪傑が現はれて來てからも、何我がプロシアが一度本氣になつて劒を執つて立つたら、ナポレオン如きに敗けるものかと、昔の夢を妄信してゐたのである。

しかるに國王のフレデリック、ウイリアムは餘り戰爭を好まず、寧ろ平和を望んでゐたから、諸國が對佛同盟を結んだときも局外中立を守つてゐた。そして何れか優勢な方へ加擔しようと思つてゐたのである。然るに、ナポレオンの勢が日増に盛んになつて來たのでプロシア國民は少しも早くナポレオンの勢威を挫きたいと望んでゐた。

時にナポレオンはウルム役の前に兵を率ゐて。プロシアの領土を侵したこと、又今度はライオン同盟を組織してその保護者になつたと聞いて、プロシアのフラ

「プロシアの空威張奴！」

ンスに對する感情は一層反抗の度を高めたのである。

こゝにいよ〳〵プロシアがフランスに對して干戈を執る導火線といふべき一つの事件が起つた。

夫れはナポレオンがイギリスと平和の談判をして時に、先年ナポレオンが一旦プロシアに割讓しようと約束したハノーヴアをば、イギリスに還してもいゝといふ意向を洩した。

これを聞いたプロシア國民の激昂はいよ〳〵その頂上に達した。

國内は誰も彼も一齊に開戰を絶叫した。皇后の如きは、自分の名を書いた聯隊の軍服を身に纏うて、そのやさしい姿を馬上ゆたかに鞭ちながら軍隊を指揮した、又ベルリンの若い軍人などはフランス大使館の前で軍刀を研ぐ眞似などして、フランスの使臣を威赫かさうとした。ナポレオンがこの事を聞いて

『プロシアの空威張奴！今にフランス人の劍を研ぐに及ばぬことを思ひ知らせて呉れよう。』

＊ナポレオン

ロシア、イギリス交々プロシア王に開戰を勸む

と一喝した。

ロシア皇帝は、プロシアの國民がフランスに對して非常に激昂して居ることを聞き、幾度もベルリンを訪うて、百方プロシア王に勸めて、開戰を促したのであつた。

イギリスも亦特使をベルリンに派遣して國王に開戰を說いた。

こゝに至つて如何なプロシア王も開戰しない譯には行かなくなつた。

佛軍ライン河畔に迫まる

この時ナポレオンは早速二十萬の大軍を動かして密かにライオン河畔に迫つた、一方プロシアは表面何氣なく裝はうて十三萬の軍をエナの近傍に集めた。そしていよ〳〵兵を進め著るしくその戰線を擴大してゐるのを見たナポレオンは、微笑しながら言つた。

『プロシア軍の愚味なるを見よ。徒らに軍隊をひろげて自ら敗北の用意をしてゐるではないか。』

と。

ルドウイヒ王弟の奮戰

フランス軍は三方に分かれて敵軍に向つた。

兩軍は激しく戰つた。精鋭なフランス軍にはプロシア兵が死力を盡して戰つたが、到底敵することが出來なかつた。

その時、プロシア軍一方の指揮官に王弟ルドウイヒがゐた。彼は素より資性勇邁であつたから、味方がいよ〳〵敗け戰ときまつて退却し始めた時も、最後まで踏み止まつて激しく奮戰した。いよ〳〵部下の者共が皆全滅になつてからも、彼は單身劍を揮つて、縱横に斬り立てた。さすがフランス兵も、その勢に恐れて辟易してか、一時稍々色めいたが、つひに衆寡敵せず、十餘人のフランス兵を斬り斃してのち、敢なき最後を遂げて了つた。

フランス軍ナウムブルグを占領す

フランス軍は勝に乘じて、敵の本營の背後に突進した。そして首尾能くも一氣ナウムブルグを占領して、其彈藥庫を爆破した。

そこでプロシアの本營に孤立の苦境に立たなければならなくなつた。

プロシア王はナウムブルグが陷落したことを聞いて驚愕措くところを知らなか

ナポレオンの出動

つた。彼は直ちに自ら大軍を率ゐて兩道からナウムブルグ方面に向つた。

ナポレオンも、プロシア王が大軍を率ゐて攻め上つたことを聞いたから、直ぐに自分も先鋒隊を率ゐて之れに向つた。本隊は後から來るように命じたのである。

彼がエナに着いたのはその年の十月十三日の暮方であつたが、その翌朝にプロシアの大軍が、このエナに攻込んで來ることが偵察の報告で分つた。

ナポレオンの奇策

ところが後から來る筈になつてゐる本隊が、このエナに着くには、まだ三四十時間のあひだがあつた。ナポレオンは味方の不利な狀態にあるのを知つて、一時は非常に困つた。敵も味方の本隊がまだ着かないことを知つてゐるらしい。ぐづぐづしてゐれば、敵に機先を制せられて了ふ。それよりは、奇策を以て敵を惱ませば、その内には本隊も到着するであらうと思つたから、彼は夜通しで自ら將卒を指揮しながら、密かに岩石を碎いてはエナの前方に通ずる路を作り、そして大砲を山の上に引上げさせた。前から見れば誰だつて、こんな高い丘に砲列が布いてあるとは思へないのである。

フランス軍にこんな備へがあるとは夢にも豫想しないプロシア軍は、果して十四日の朝まだき、未だ夜の明けきらぬ中に、突然フランス軍の左翼を目掛けて攻撃を開始した。

時候が恰度十月であつたから、秋霧が一面に呼や山を立ち籠めて、敵味方の位置が判然しなかつた。

ナポレオンは丘上につつ立つて濃霧の晴れるの待つてゐたが、やがて十時頃になつて次第に霧が薄くなつて行くのを見た。

と見ると十月の赫々たる太陽が霧霧を拂つて輝き出した。

これこそフランス軍にとつて瑞祥ある「アウステルリッツの太陽」であつた。

今は敵の姿も鮮やかに眼下に見下された。全軍は一齊に勇み立つた。

ナポレオンは直ちに命令を下して、昨夜急拵への砲臺から敵軍に向つて砲彈を浴せかけた。

プロシア軍は思ひ設けぬ丘の上から、思ひ設けぬ砲擊を受けたので、周章狼狽

を極め、將士の倒るゝ者を相續ぎ頗る苦戰に陷つた。

その時恰も好し、ネイ將軍がフランス軍の本隊を率ゐて、こゝへ到着した。そこで此勢に乘じて敵軍を總攻擊することになつた。先づ敵軍の隊伍が、すでに亂れ始めたのを知つたから、ナポレオンはムラー元帥に命じて突擊させた。ムラー元帥は忽ち馬を陣頭に進めて騎兵隊に下知した。そこで騎兵隊は疾風のやうな勢で敵軍に突入し縱横に斬りまくつた。

プロシア軍は茲に全く意氣沮喪して了つて、一とたまりもなく先を爭つて敗走し始めた。フランス軍は息をもつかせず直ぐその後を追擊したから、敵の死傷算なく十三萬の軍勢は殆んど全滅した。

恰度この十四日の同日時刻エナから十五哩を距つたアウエルステットで、プロシアの先鋒軍がフランス軍のために破られた。

半世紀の誇りであつたフレデリック大王の精鋭なプロシア軍は、かうして一日の間に、兩所で見苦しい敗け方をして了まつた。

ナポレオン長驅ベルリンに入る

かくてナポレオンが大軍を率ゐて威風凜々プロシアの首都ベルリンに乘込んだのは十月の二十七日であつた。

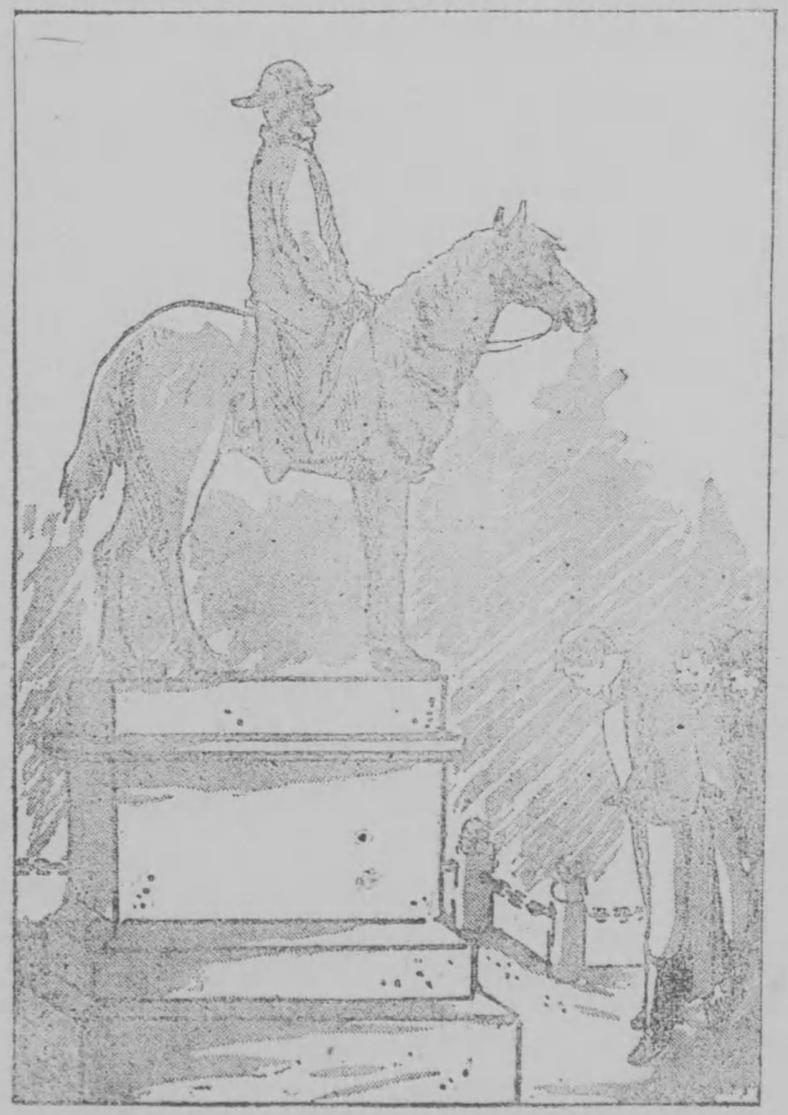
プロシアの國王、皇后以下は、僅かの殘兵に護られながらベルリンを遁れ出て北方の舊都ケニヒスベルヒに落ち延びた。

プロシアの國民も、味方が意外の大敗に士氣俄かに沮喪する。諸所の城砦も、みな風を望んでナポレオンの軍に降つた。そしてナポレオンの今更偉大なのに身震ひして畏れた。

ナポレオンが勝ち誇れるフランス軍勢を引き連れてベルリンに入つたとき、市民は佛軍將士の美々しい武裝に引きかへて、皇帝自身はたゞ質素な帽子を被り、きたない灰色の外套を纏うてゐるのを見て驚いたといふことである。

ナポレオンはベルリンに入るや直ちに市の公園にあるフレデリック大王の像を訪れた。彼は少年時代からフレデリック大王の傳記を讀んで、その威風を慕つてゐたのである。今や敵國ではあるけれども、個人として英雄の風を欣慕するの情に差

ナポレオンフレデリック大王の像に額づく



卑法なプロシアの總大將

はなかつた。彼は像の前に佇んで、劍を下げ帽子を脱いで一禮した。

彼はフランスの聯隊が此所を行進するときは、必ずこの大王の像に敬禮を忘れるなと命令した。何とゆかしい心の流れではないか。

ナポレオンがベルリン滯在中、彼が如何に卑劣な行爲を憎み、又一面如何に人情の優しさを有つてゐたかを物語る、二つの逸話がある。

此度の戰爭でプロシア軍の總司令官を承はつた人はブラウンシコヴアイ公といふ人であつたが、彼はエナの敗戰に逸早く遁走したが不幸重傷を負つた。けれども漸くのことで自分の領地に退却することが出來た。そしてナポレオンがいよいよベルリンに入城したことを聞くと、直ぐに彼に一書を送つて哀願した。それは

『予は、唯プロシア王の命によつて、止むなく陛下に對抗したばかりである。ゆゑに陛下は決して、プロシアの國土と、予の領土とを混同せられぬやうに願いたい。』

といふのであつた。

＊ナポレオン